

# 阿含經典に関連する三点のトカラ語 B 断片について

荻原裕敏

キーワード: THT404 THT590 THT1550 説一切有部 阿含經典

## 要旨

本稿では阿含經典中に関連する記述を有する三点のトカラ語 B 断片を紹介する。その内二点は既に *TochSprR(B)II* で転写が出版されている THT404 及び THT590 であり、もう一点はこれまで未出版であったドイツ所蔵断片 THT1550 である。筆者の研究によれば、これら三点の断片は以下のような仏典に比定或いは関係づけられる。

THT404: 『中阿含經』「轉輪聖王修行經」

THT590: 『長阿含經』「世記經」

THT1550: 『中阿含經』「四洲經」

また、漢訳仏典などのパラレルを利用して当該断片の内容を検討した結果、これら三断片の所説は説一切有部の系統であると判断される。

## 0. 導入

西域北道で発見されたトカラ語仏典には經・律・論の所謂三蔵に加えて、比喩譚・本生譚・仏伝といった本縁部に属する断片なども知られているが、阿含經典に比定される断片の内トカラ語のみで書かれたものは非常に少ない。本稿では、筆者によって阿含經典中に関連する記述を有する事が明らかにされた三点のトカラ語 B 断片を紹介する。

ここで紹介する三点の断片中、THT404 及び THT590 の二点は既に筆者が論文として出版或いは口頭発表を行ったものであるが、残りの一点 THT1550 は今回新たに筆者が発見したものである。筆者の研究によれば、THT404 は『中阿含經』「轉輪聖王修行經」に比定され、THT590 は『長阿含經』「世記經」に関連づけられる。一方、THT1550 は『中阿含經』「四洲經」に比定される。

## 1. THT404 について<sup>1</sup>

### 1-1. THT404 の転写と和訳

この断片はドイツ探検隊によって *Shorchuk* で発見されたものであり、現在はベルリンに所蔵されている。本断片の転写は Nr.404 として *TochSprR(B)II*: 268-269 で既に出版されており、その際校訂者は暫定的に「仏伝 (= *Buddhalegende*)」に属する断片として分類したが、

<sup>1</sup> 本節の内容は荻原 (2010) の改訂版である。論文投稿後、筆者はベルリン所蔵の原文書の調査を行う事ができ、その際に新しく発見した点もあったため、原稿提出後修正版を仕上げ編集者に提出したが、出版には間に合わず古いものが出版されてしまった。また、筆者には一度も校正の機会が与えられなかったため、出版された論文には誤植等の問題が多い。ここでは、これらを訂正した上で改訂版を公表する次第である。

転写に附された断片に対する解説部分には具体的な参考文献は一切引用されておらず、現在に至るまで未比定のままであった。筆者の研究によれば、当該断片は漢訳『中阿含經』「轉輪聖王修行經」及びパーリ語«*Cakkavatti-sīhanāda-suttanta*»に比定される。この断片は転写に附された解説に記されるように韻文と散文が交替する文体で書かれており、断片のサイズは横 18.7cm・縦 12.8cm である。また、書写に使用されている *Brāhmī* 文字は Tamai (2011) の分類では II-1 期に、また言語特徴からは Peyrot (2008) の分類の Classical に属している。なお、以下に提示する転写は筆者による調査に基づく訂正も加えており、*TochSprR(B)II* のものとは異なる部分がある<sup>2</sup>。

[転写]

a

- 1 [s].. -- akā[k]ka † mākampa yapsi kr<sub>u</sub>i su p<sub>g</sub>knātrā nervāñś(ś)ai ///
- 2 [d]ānusmr̥tī<sup>[11]</sup> ñem paricchet<sub>t</sub> † 6 // || ñake no [k<sub>at</sub>k]oś<sub>v</sub> wānta[r](e) ///
- 3 [ndri]ntasa<sup>[2]</sup> kaum meñ<sup>ā</sup>ntsa lak<sub>u</sub>tsa cem[tś] kektseñe şeyä † salamo luwo<sup>[13]</sup> ///
- 4 rm[e]r kka † katkauñaisa ka kektseñi porośyem<sup>[4]</sup> cem<sub>t</sub>ś mā ///
- 5 [śa]le[nne] mā no māskūtrā om[p<sub>v</sub>] lyauto tsroye wa[r<sub>a</sub>] ///
- 6 kāsne [c].<sup>[5]</sup> mā śp<sub>g</sub> [c]āmpyā[r]e † 2 // || tu[m]em s[n]ai keś<sub>v</sub> pikwala k<sub>at</sub>[k]o[rm]e(m) ///
- 7 y[o]r<sub>v</sub><sup>[6]</sup> walo mā wasa † snaici takāre o[n]olmi c[w]ī yapoyne † <sup>[7]</sup> ///
- 8 śco<sup>[8]</sup> [k][ā](nte) lykaṃ ce<sub>u</sub> [śñ](a)ss[o]ñcā † se we[ś<sub>g</sub>]mñ<sup>ā</sup> [ñ](a)[kt](a) [k<sub>a</sub>]lypi(ya)<sup>[9]</sup> ///

b

- 1 ñi[ś<sub>v</sub>] <sup>[10]</sup> [ś](a)[ñ]<sup>ā</sup> y[ā]snā[me](m)<sup>[11]</sup> [cwi] walo wasa waipacce [†] t[e]m̥ntsa pśā[y](e)<sup>[12]</sup> ///
- 2 [w]aipecce [†] 3 karts](e c)[w](i)<sup>[13]</sup> tāka k[a] ma<sup>[14]</sup> wes [ra k<sub>a</sub>]ly[p]iye[m<sub>v</sub>] wes<sub>g</sub>[ñ] ra ///
- 3 ka śai[ś](ś)ene 4 p[ī]ś [wānt](a)r(wa)sa [m]. -- <sup>[15]</sup> [o](no)lmi [†] ś[aul]tsa pe<sup>[16]</sup> ///
- 4 [ll](e)[n]t<sup>[17]</sup> po[s]taṃ meñ[ā](kte 5 // ok<sub>t</sub>) [t](ma)ne pikwala ś(au)[l<sub>v</sub>] ///
- 5 [p.]e // tumem all[ek k<sub>a</sub>lymi]y. ----- [c].e ///
- 6 - mā lyku[ññ]e (pra)le<sup>[18]</sup> † k(e)rt[e] wa<sub>t</sub>k<sub>a</sub>skau y[ā]mts(i) ñā[ś] ñake [tusa] ly[kaṃ] k[ā](a)[m]<sup>[19]</sup> ///
- 7 [r.]o ā -- <sup>[20]</sup> † y[po]yi śāmna klyausāre walo ke kert[e] (yā)mśa[te] † [k<sub>u</sub>se] ///
- 8 --- rk[i] † wes rano ñake kertem yamam<sub>tar</sub> ścirona śñāra † [k<sub>u</sub>s](e) ///

[注釈]

<sup>2</sup> 本稿で採用する転写方法は以下の通りである。なお、転写や注釈の際に転写を使用する以外、本稿で引用するトカラ語は transliteration の形式である。

[ ]: 破損している箇所

( ): 筆者によって推定された箇所

///: 写本の破損箇所

-: 欠けている akṣara

∴: akṣara の欠けている子音若しくは母音

- (1): *TochSprR(B)II*: 268 に従い  $(p\bar{i})[d]ān\bar{u}smrti$  と再建する。
- (2): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.5 に従い  $(\dot{s}a\bar{n}^{\bar{a}})in\bar{d}rintasa$  と再建する。
- (3): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.7 に従い  $(ram\bar{t})$  と再建する。
- (4): この読みは Schmidt (2000: 226, 231) に従っている。
- (5): *TochSprR(B)II*: 269, Anm.2 に従い  $(a)k\bar{a}s\bar{n}e$  と再建する。ただし、最後の *akṣara* としては  $c(ai)$  或いは  $c(em)$  のどちらかが再建されるべきか、判断が困難である。
- (6): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.3 に従い  $(\bar{a})y\bar{o}r$  と再建する。
- (7): この部分は  $[a]$  と読む事ができるかも知れない。
- (8): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.4 に従い  $(tumem\bar{l}ānt\bar{a})sco$  と再建する。
- (9): 語根 *kälyp-* ‘to steal’ の三人称単数・過去形・能動態である。Malzahn (2010: 593-594) に指摘されるように、これまではこの形式として *kälwiya* のみが知られていた。
- (10): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.7 に指摘されるように、この箇所には韻文の番号として {1} ではなく {2} が期待される。
- (11): *TochSprR(B)II*: 269, Anm.8 では、この部分を  $y[\bar{a}]s[n]ā(r\ no)$  と再建し、且つこの読みを  $y\bar{a}st\bar{a}(r\ no)$  と解釈すべきであるとしている<sup>3</sup>。しかしながら、筆写は残存部分と内容から  $y[\bar{a}]s[n]ā[me](m)$  と再建した<sup>4</sup>。この語形は *yasna\** の奪格と解釈されるが、この語の語義については、和訳に対する注釈を参照されたい。
- (12): この語形の推定は Malzahn (2010: 916-917) に従っている。
- (13): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.10 では  $karts(e\bar{s})cwi$  と推定されているが、筆写は断片の残存部分と文脈から  $kartse(cwi)$  と推定した。
- (14): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.11 に指摘されるように、この部分は  $k\bar{a}\ m\bar{a}$  と解釈される。
- (15): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.14 は  $(tane\ p\bar{a}rsko\bar{s}\ ono)lmi$  と推定しているが、残存部分と文脈から  $[m](\bar{a}\ p\bar{a}rsko\bar{s}\ \bar{a})[o](no)lmi$  と推定する方が妥当であると思われる。
- (16): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.15 に従い  $pe(\bar{n}yaisa)$  と再建する。

<sup>3</sup> 和訳に対する注釈で検討するように、この部分にトカラ語 B の *yästār* ‘je das Doppelte’ (Thomas 1957: 119 及び *TEB* I: 161, II: 227) を推定する説は否定される。また、Thomas (op.cit.) に基づいた語義は現在まで踏襲されているが、Winter (1987: 239) は ‘there seems to be no explanation for B y- instead for w- as found in B *wasto* “bi-”, and the implied assumption that B -o was deleted before a following vowel is troublesome’ と述べ、この語形に対する形態論的難点を指摘している。なお、Winter (1992: 143-144) も参照。

*TEB* II では設定されていないが、Adams (1999: 502) は Krause (1952: 276) を踏襲して、動詞語根 *yäst-‘hurl down’* を設定している。ただし、Adams によって引用されている用例は写本では *-n-* と書かれており、この語根の存在を根拠づける事はできない。さらに、Krause 及び Adams は B394b2 に在証される *yästārāk* を当該語根の三人称複数・過去形と解釈しているが、トカラ語の形態論からこの解釈は否定される。即ち、この語形が在証される断片は Peyrot (2008: 221) 及び Malzahn (2007: 265) に指摘されるように Archaic Tocharian B の段階に属しており、Peyrot (op.cit.: 132-136) に従えば、この段階では当該語根に設定される過去形第 I 類の三人称複数・過去形・能動態の語尾は *-r* ではなく *-re* である。そのため、Krause 及び Adams による解釈は成立し難い。また、この動詞については、Malzahn (2010: 804-805) も参照されたい。筆者は語義の解明には至っていないが、上記の *yästārāk* を Winter (1992: 143-144) が引用している PK AS 17Da5 に在証される *yäs[t]ā[r]* と関係づけられるのではないかと考えている。ただし、筆写の調査ではこの語形は *yäs[n]ā[r]* と読む可能性も否定しきれず、仮に後者の読みが成立するならば、この語形は *yasna\** ‘treasure / hoard’ に接尾辞 *-ār* が附された派生語である可能性も指摘される。

<sup>4</sup> なお、Schmidt (1986: x) は、この箇所に対する *TochSprR(B)II* の訂正を否定し *yasna* を設定しているが、奪格形の推定には至っていない。

- (17): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.15 に従い(*pa*)[*ll*](*e*)[*n*]と再建する。なお、この *pällent postäm meñäkte* に類似した表現としては、B292b1: [*mä*]kte *meñe (pä)llent postäm* 「満月の後の月のように」が在証される。
- (18): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.17 に指摘されるように、この部分は(*pra*)lle と解釈されるべきである。
- (19): 文脈と残存部分から、語根 *käl-* ‘lead, bring’の接続法・三人称複数・能動形を推定した。ただし、三人称単数も同一の形式のため、単数として解釈する可能性も排除しない。和訳で示すように複数形ならば、この語形は初出である。
- (20): 残存している部分からは、最後の *akšara* が[*ṣ*]或いは[*ṭ*]のどちらであるか判断する事ができない。

[和訳]

a

- 1 ... 願望 ... 。もし彼が多くの人と共に涅槃(城)<sup>[1]</sup>に入るつもりならば ///
- 2 (*Pī*)*dānusmṛti* という名前の章 ... {6} || || さて今、過ぎ去った事 ///
- 3 彼らの体は(彼ら自身の)力によって日月の如く輝いていた。空を飛ぶ動物(のように) ///
- 4 突然 ... 彼らの体は喜びによって成長していました。... ///
- 5 その山々には穴や裂け目、水はありませんでした。///
- 6 彼等は空で ... する事ができませんでした。{2} || || それから、数えられない年月が過ぎ去ってから ///
- 7 王は施し物を与えませんでした。彼の国には貧しい人々がいました。... ///
- 8 (それから)持ち主たちは<sup>[2]</sup>、王の下にこの泥棒を連れて行きました。私達の主よ。この者は ... を盗みました。///

b

- 1 私 ... {1} 王は自らの宝蔵<sup>[3]</sup>から彼に財産を与えました。これによって生きよ。///
- 2 財産 ... 。{3} 彼には良い事が起きた。どうして私達も盗みをしないでいられようか。私達にも ///
- 3 人々の中で ... 。{4} 人々は五事を恐れなかった<sup>[4]</sup>。命、輝き ///
- 4 満月の後の月 ... (5) || (八)万年の寿命<sup>[5]</sup> ///
- 5 ... || それから、その他の方角 ... ///
- 6 ... 窃盗は引き起こされるべきではない。今、私は剣を作るように命じよう。それによって彼らは泥棒(を捕えられよう<sup>[6]</sup>。) ///
- 7 ... 。国の人々は王が剣を作った事を聞きました。... する者<sup>[7]</sup> ///
- 8 ... 今、私達も自分自身の<sup>[8]</sup>鋭い剣を作ろう。... する者<sup>[7]</sup> ///

[注釈]

- (1): 先行する形容詞 *nervāṇāṣṣai* が単数女性形・斜格である事から考えて、ここには *riye-* ‘city’

の処格 *rīne* が再建される。この表現は B580a4: *nervāñṣṣai rīne yapim* 「私は涅槃城に入りますように」にも在証される。

- (2): トカラ語 B の *ṣñassoñcä* は \**ṣñassu* の複数主格である。Thomas (1957: 119) によって、この語に対して ‘die nach Besitz Verlangenden’ という解釈が提出されて以降、Adams (1999: 665) が ‘seeking possessions’ としている事からも窺えるように、トカラ語学ではこの語義が受容されてきた。パーリ文はこの語の解釈に対しては何の手がかりも与えないが、漢訳の平行である『中阿含經』には「其主捕伺收縛，送詣刹利頂生王。」(T.01, no.26, 522b1) とあるように、この部分の主語が記されている。上に挙げた和訳では筆者はこの語が *ṣañ* ‘own’ から派生した形容詞であり、またこの語の原義が ‘be in control of’ と推定される点に基づいて「持ち主・所有者」と訳した<sup>5</sup>。
- (3): トカラ語 B の *yasna\** は Adams (1999) には登録されていないが、Schmidt (1986: X, 21, 55 及び 90) はドイツ所蔵の «Karmavācanā» 写本に属する断片 THT1114 に在証される処格形 *yasnane* に基づいて ‘Schatzkammern’ という訳語を与えている。また、Schmidt によって指摘された用例以外にも、この語は PK NS 44a5 及び PK NS 299a4 にも在証されている<sup>6</sup>。特に後者の用例では漢訳『十誦律』「波逸提五十八」に附された最初の因縁譚に見られる「藏」或いは「寶物」(T.23, no.1435, 107c3 及び c10) に対応しており<sup>7</sup>、さらに本稿で検討している THT404 の平行には『長阿含經』「出庫物以供給之」(T.01, no.1, 40b27)・『中阿含經』「出財物而給與之」(T.01, no.26, 522b5) とある。以上の対応を考慮に入れ、*yasna\** に対して「宝藏・財物」という訳語を与えた<sup>8</sup>。
- (4): ここで言及されている「五事」とは、パーリ文に見られる以下の内容を指すと考えられる。なお、この五項目は仏教徒の守るべき五項目とも一致する。

*rājā cakkavatti evam āha : pāṇo na hantabbo. adinnaṃ n’ ādāttabbaṃ. kāmesu micchā na caritabbā. musā na bhāsitabbā. majjaṃ na pāttabbaṃ. yathā-bhuttañ ca bhūñjathā ti.*

<sup>5</sup> この語は B152a6 にも在証されると思われるが、後続する文脈を欠いており語義の推定には貢献しない。

<sup>6</sup> この二断片の暫定的な比定については、Pinault (2007: 182 及び 186) を参照。

<sup>7</sup> この二断片は Ogihara (2009b: 364-368) で扱った。そこでは暫定的に ‘golden pieces’ という訳語を与えておいた。なお、中央アジア将来の二点の梵文断片 (= SHT1283, 1469) は『十誦律』「波逸提五十八」に対応するが、この部分を含まない。また、漢訳『撰集百緣經』で使用される「伏藏」(T.04, no.200, 204a29 及び 230c9) は、梵文 «Avadānaśataka»: *ratmanidhānāni; nigūḍhāni nidhānāni* (Vaidya 1958: 9.26 及び 140.6) に対応している。

<sup>8</sup> Schmidt (op.cit.) によって解説された *prakrona yasnane* は形容詞 *prākre* ‘firm, hard’ の複数女性形・斜格が附されており、形態論的には *yasna\** が \**yas* の複数形として解釈されていた事を示している。この語形について、Schmidt (op.cit.: 91, Anm.10) はこの語が plural tantum であった可能性を提示しているが、筆写はこれに対して *yasna\** という語を再建したい。即ち、トカラ語 B のコーパスにはこれまで \**yas* という語形は知られていないだけでなく、ロシア所蔵のトカラ語 B 断片 SI B/Toch.6a6: */// ntaṣṣe yāsna krentew[n](a) – ṣe krau .o ///* からは、この部分は梵語 *dharmakośa-* (or *kośa-*) ‘the treasury or collective body of laws and duties (MW: 510c)’ に対応する語形と解釈し (*pelaikne*) *ntaṣṣe yāsna* と推定され得る。筆者の推定が正しいならば、先行する形容詞と同様にトカラ語 B の *yasna\** は単数形であり、且つ梵語 *kośa-* ‘a treasury or apartment where money or plate is kept, treasure, accumulated wealth (MW: 314a)’ に対応する事となり、上記の筆者の解釈を裏付ける。ロシア所蔵断片 SI B/Toch.6a6 は文字・言語特徴の両面から Archaic Tocharian B の段階に位置づけられるため *yasna\** は本来単数形であり、Schmidt が発見した *prakrona yasnane* は後代の analogy によるものと推定される。また、Archaic Tocharian B に分類される THT1215.frg.d.a1 にも *yāsna* が在証されるが、先行する部分が破損しており、文脈は不明である。さらに、THT1371.frg.g.b3: */// tstsana yasna* という例が確認され複数形として扱われているが、Peyrot (2008: 223) に指摘されるように、この断片は Late Tocharian B に分類され、同様に後代の analogy と推定される。なお、語源的にはこの語はトカラ語 B の *yasa* ‘gold’ と関係づけられる。

(DN. xxvi: 62)<sup>9</sup>

- (5): *TochSprR(B)II* による再建が正しいならば、『中阿含經』「父壽八萬歲，子壽四萬歲。」(T.01, no.26, 522b13) を参考に、この部分は「八万年の寿命は四万年に減少した」と推定する事が可能である。なお、この記述の解釈については 1-3 節を参照。
- (6): この部分は『中阿含經』「我今寧可作極利刀，若我國中有偷盜者，便收捕取」(T.01, no.26, 522b21-22) に対応しているものと見られる。
- (7): 形態論的には疑問詞と解釈する事も可能であるが、ここでは対応する以下のパーリ文を参考に關係詞として解釈した。

*assosum kho bhikkhave manussā : ye kira bho paresam adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyanti, tesam rājā dhanam anuppadesī ti. sutvāna tesam etad ahoṣi – yan nūna mayam pi paresam adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyeyyāmā ti.* (DN. xxvi: 66)

- (8): Winter (1987: 239 及び 1992: 144) ではトカラ語 B の *ṣṅār* が在証される用例 (H 149. 14b5 = IOL Toch 1) は文脈が判然としないとしているが、本稿で扱っている THT404b8 のパラレルは、Adams (1999: 665) が記述するようにこの語が distributive の意味を有する事を裏付ける事ができよう。

## 1-2. THT404 の比定について

筆者の研究によれば、前節で提示した THT404 に対しては以下のパラレルが指摘される。

[パーリ]

«*Cakkavatti-sīhanāda-suttanta*» [DN. xxvi: 58-79]

[漢訳]

『長阿含經』卷 6 「轉輪聖王修行經」 [T.01, no.1, 39a21-42b19]

『中阿含經』卷 15 「轉輪王經」 [T.01, no.26, 520b16-525a3]

これらのパラレルはいずれも非常に長いため、以下では THT404 の比定に貢献する部分のみを引用する。また、THT404 と比較可能な部分をパーリ文では bold 体で、漢訳では下線を附して示す事とする。なお、波線及び二重線については次節を参照。

[パーリ]

«*Cakkavatti-sīhanāda-sutta*»

*tesam sutvā dhammikaṃ hi kho rakkhāvaraṇaguttiṃ saṃvidahi, no ca kho adhanānaṃ dhanam anuppadāsi, adhanānaṃ dhane ananuppadiyamāne daliddiyaṃ vepullaṃ agamāsi. daliddiya vepulla-gate aññataro puriso paresam adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyi. tam etaṃ aggahasuṃ, gahetvā rañño khattiyassa muddhāvasittassa dassesuṃ – ayaṃ deva puriso paressaṃ adinnaṃ*

<sup>9</sup> この部分の英訳については、Rhys Davids *et al.* (1921: 63-64) を参照。

**theyya-saṃkhātaṃ ādiyī ti.**

evaṃ vutte bhikkhave rājā khattiyo muddhāvasitto taṃ purisaṃ etad avoca :  
saccaṃ kira tvaṃ ambho purisa paresaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyī ti ?  
saccaṃ devā ti.  
kiṃ kāraṇā ti ?  
na hi deva jīvāmī ti.

**atha kho bhikkhave rājā khattiyo muddhāvasitto tassa purisassa dhanam anuppadāsi – iminā tvaṃ ambho purisa dhanena attanā ca jīvāhi, mātā-pitaro ca posehi, putta-dāraṇī ca posehi, kammante ca payojehi, samaṇesu brāhmaṇesu uddhaggikaṃ dakkhiṇaṃ paṭiṭṭhāpehi sovaggikaṃ sukha-vipākaṃ sagga-saṃvattanikaṃ ti.**

evaṃ devā ti kho bhikkhave puriso rañño khattiyassa muddhāvasittassa paccassosi.  
aññataro pi kho bhikkhave puriso paresaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyī. taṃ enaṃ aggaheṣuṃ, gahetvā rañño khattiyassa muddhāvasittassa dassesuṃ – ayaṃ deva puriso paresaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyī ti.

evaṃ vutte bhikkhave rājā khattiyo muddhāvasitto purisaṃ etad avoca :  
saccaṃ kira tvaṃ ambho purisa paresaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyī ti ?  
saccaṃ devā ti.  
kiṃ kāraṇā ti ?  
na hi deva jīvāmī ti.

**atha kho bhikkhave rājā khattiyo muddhāvasitto tassa purisassa dhanam anuppadāsi – iminā tvaṃ ambho purisa dhanena attanā ca upajīvāhi, mātā-pitaro ca posehi, putta-dāraṇī ca posehi, kammante ca payojehi, samaṇesu brāhmaṇesu uddhaggikaṃ dakkhiṇaṃ paṭiṭṭhāpehi, sovaggikaṃ sukha-vipākaṃ sagga-saṃvattanikaṃ ti.**

evaṃ devā ti kho so bhikkhave puriso rañño khattiyassa muddhāvasittassa paccassosi.

**assosuṃ kho bhikkhave manussā : ye kira bho paresaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyanti, tesuṃ rājā dhanam anuppadesī ti. sutvāna tesuṃ etad ahosi – yan nūna mayam pi paresaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyeyyāmī ti.**

atha kho bhikkhave aññataro puriso paresaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyī. taṃ enaṃ aggaheṣuṃ, gahetvā rañño khattiyassa muddhāvasittassa dassesuṃ – ayaṃ deva puriso paresaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyī ti.

evaṃ vutte bhikkhave rājā khattiyo muddhāvasitto taṃ purisaṃ etad avoca :  
saccaṃ kira tvaṃ ambho purisa paresaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyī ti ?  
saccaṃ devā ti.  
kiṃ kāraṇā ti ?  
na hi deva jīvāmī ti.

**atha kho bhikkhave rañño khattiyassa muddhāvasittassa etad ahosi : sace kho ahaṃ yo yo paresaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyissati, tassa tassa dhanam anuppadāmi, evam idaṃ**

**adinnādānaṃ pavaḍḍhissati. yaṃ nūnāhaṃ imaṃ purisaṃ sunisedhaṃ nisedheyyaṃ, mūla-ghaccaṃ kareyyaṃ, sīsam assa chindeyyaṃ ti.**

*atha kho bhikkhave rājā khattiyō muddhāvasitto purise āṇāpesi : tena hi bhaṇe imaṃ purisaṃ dalhāya rajjuyā pacchā-bāhaṃ gāḷha-bandhanaṃ bandhitvā, khuramuṇḍaṃ karitvā, kharassarena paṇavena rathiyāya rathiyaṃ siṅghāṭakena siṅghāṭakaṃ parinetvā, dakkhiṇena dvārena nikkhamitvā, dakkhiṇato nagarassa sunisedhaṃ nisedhetha, mūlaghaccaṃ karotha, sīsam assa chindathā ti.*

*evaṃ devā ti kho bhikkhave te purisā rañño khattiyassa muddhāvasittassa paṭissutvā taṃ purisaṃ dalhāya rajjuyā pacchā-bāhaṃ gāḷha-bandhanaṃ bandhitvā, khura-muṇḍaṃ karitvā, kharassarena paṇavena rathiyāya rathiyaṃ siṅghāṭakena siṅghāṭakaṃ parinetvā, dakkhiṇena dvārena nikkhamitvā, dakkhiṇato nagarassa sunisedhaṃ nisedhesuṃ, mūla-ghaccaṃ akaṃsu, sīsam assa chindiṃsu.*

**assosuṃ kho bhikkhave manussā, – ye kira bho paresaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyanti, te rājā sunisedhaṃ nisedheti, mūla-ghaccaṃ karoti, sīsāni tesam chindatī ti. sutvāna tesam etad ahoṣi : yaṃ nūna mayam pi tiṅhāni satthāni kārūpeyyāma, tiṅhāni satthāni kārūpetvā yesaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyissāma, te sunisedhaṃ nisedhessāma, mūla-ghaccaṃ karissāma, sīsāni tesam chindissāmā ti.**

*te tiṅhāni satthāni kārūpesuṃ, tiṅhāni satthāni kārūpetvā gāma-ghātam pi upakkamiṃsu kātum, nigama-ghātam pi upakkamiṃsu kātum, nagara-ghātam pi upakkamiṃsu kātum, pantha-dūhanam pi upakkamiṃsu kātum. te yesaṃ adinnaṃ theyya-saṃkhātaṃ ādiyanti, te sunisedhaṃ nisedhenti, mūla-ghaccaṃ karonti, sīsāni tesam chindanti.*

*iti kho bhikkhave adhanānaṃ dhane ananuppadiyamāne daliddiyaṃ vepullaṃ agamāsi, daliddiye vepulla-gate adinnādānaṃ vepullam agamāsi, adinnādāne vepulla-gate sattham vepullam agamāsi, satthe vepulla-gate pāṇātipāto vepullam agamāsi, pāṇātipāte vepulla-gate musā-vādo vepullam agamāsi, musā-vāde vepulla-gate tesam sattānaṃ āyu pi parihāyi, vaṇṇo pi parihāyi ; tesam āyunā pi parihāyamānānaṃ vannena pi parihāyamānānaṃ asīti-vassa-sahassāyukānaṃ manussānaṃ cattārīsam vassa-sahassāyukā puttā ahesuṃ. (DN. xxvi: 65-68)<sup>10</sup>*

[漢訳]

『長阿含經』「轉輪聖王修行經」

「王聞其言，即行舊政，以法護世，而由不能拯濟孤老，施及下窮。時，國人民轉至貧困，遂相侵奪，盜賊滋甚，伺察所得，將詣王所自言。此人為賊，願王治之。王即問言。汝實為賊耶。答曰。實爾。我貧窮飢餓，不能自存，故為賊耳。時，王即出庫物以供給之，而告之曰。汝以此物供養父母，并恤親族，自今已後，勿復為賊。餘人轉聞有作賊者，王給財寶，於是復行劫盜他物，復為伺察所得，將詣王所自言。此人為賊，願王治之。王復問言。汝實

<sup>10</sup> この部分の英訳については、Rhys Davids *et al.* (1921: 65-68) を参照。



為賊耶。答曰。實爾。我貧窮飢餓，不能自存，故為賊耳。時，王復出庫財以供給之，復告之曰。汝以此物供養父母，并恤親族，自今已後，勿復為賊。

復有人聞有作賊者，王給財寶，於是復行劫盜他物，復為伺察所得，將詣王所白言。此人為賊，願王治之。王復問言。汝實為賊耶。答曰。實爾。我貧窮飢餓，不能自存，故為賊耳。時王念言。先為賊者，吾見貧窮，給其財寶，謂當止息，而餘人聞，轉更相効，盜賊日滋，如是無已，我今寧可桎械其人，令於街巷，然後載之出城，刑於曠野，以誠後人耶。

時，王即勅左右。使收繫之，聲鼓唱令，遍諸街巷，訖已載之出城，刑於曠野。國人盡知彼為賊者，王所收繫，令於街巷，刑之曠野。時，人展轉自相謂言。我等設為賊者，亦當如是，與彼無異。於是，國人為自防護，遂造兵杖、刀劍、弓矢，迭相殘害，攻劫掠奪。自此王來始有貧窮，有貧窮已始有劫盜，有劫盜已始有兵杖，有兵杖已始有殺害，有殺害已則顏色憔悴，壽命短促。時，人正壽四萬歲，其後轉少，壽二萬歲，然其眾生有壽、有夭、有苦、有樂。彼有苦者，便生邪姪、貪取之心，多設方便，圖謀他物。是時，眾生貧窮劫盜，兵杖殺害，轉轉滋甚，人命轉減，壽一萬歲。」 (T.01, no.1, 40b22-c27)

『中阿含經』「轉輪王經」

「從彼聞已，行如所說。然國中民有貧窮者，不能出物，用給恤之，是為困貧無財物者不能給恤，故人轉窮困，因窮困故，便盜他物。因偷盜故，其主捕伺收縛，送詣刹利頂生王，白曰。天王。此人盜我物，願天王治。刹利頂生王問彼人曰。汝實盜耶。彼人白曰。天王。我實偷盜。所以者何。天王。以貧困故，若不盜者，便無以自濟。刹利頂生王即出財物而給與之，語盜者曰。汝等還去，後莫復作。於是，國中人民聞刹利頂生王若國中人有行盜者，王便出財物而給與之。由斯之故，人作是念。我等亦應盜他財物。

於是，國人各各競行盜他財物。是為困貧無財物者，不能給恤，故人轉窮困。因窮困故，盜轉滋甚。因盜滋甚故，彼人壽轉減，形色轉惡。彼壽轉減色轉惡已，比丘。父壽八萬歲，子壽四萬歲。比丘。彼人壽四萬歲時，有人便行盜他財物，其主捕伺收縛，送詣刹利頂生王，白曰。天王。此人盜我物，願天王治。刹利頂生王問彼人曰。汝實盜耶。彼人白曰。天王。我實偷盜。所以者何。以貧困故，若不盜者，便無以自濟。刹利頂生王聞已，便作是念。若我國中有盜他物，更出財物盡給與者，如是唐空竭國藏，盜遂滋甚。我今寧可作極利刀，若我國中有偷盜者，便收捕取，坐高標下，斬截其頭。

於是，刹利頂生王後便勅令，作極利刀。若國中有盜他物者，即勅捕取，坐高標下，斬截其頭。國中人民聞刹利頂生王勅作利刀，若國中有盜他物者，即便捕取，坐高標下，斬截其頭。我亦寧可效作利刀，持行劫物，若從劫物者，捉彼物主而截其頭。於是，彼人則於後時効作利刀，持行劫物，捉彼物主，截斷其頭。是為困貧無財物者，不能給恤故，人轉窮困。因窮困故，盜轉滋甚。因盜滋甚故，刀殺轉增。因刀殺增故，彼人壽轉減，形色轉惡。彼壽轉減，色轉惡已，比丘。父壽四萬歲，子壽二萬歲。」 (T.01, no.26, 522a26-c5)

ここに引用したテキストから、THT404a6-b8 の内容が「Cakkavatti-sihanāda-suttanta」に対応

する事が窺えよう<sup>11</sup>。 *TochSprR(B)II* の当該断片に附された注釈に指摘されるように、THT404 は韻文と散文が交替する文体で書かれていた。そのため、この断片は散文で書かれているパーリ或いは漢訳仏典に対応する原典の直訳ではなく、その **adaptation** と見做されるべきである<sup>12</sup>。しかしながら、この断片の原典がインド語による仏典から翻訳されたものか、或いはトカラ仏教の側での編集によるものかは判断できない<sup>13</sup>。

### 1-3. パラレルとの比較

前節で引用したパラレルの内、一部を波線と二重線で示しておいた。これらの部分は衆生の寿命が彼らの行動の結果減少して行く事を記述している。上の引用中波線で示した箇所について、前節で挙げた三つのパラレルの間には以下のような相違が見られる。

	[寿命の長さ]	[要因]
パーリ:	80,000 > 40,000	殺生
『長阿含經』:	40,000 > 20,000	殺生
『中阿含經』:	40,000 > 20,000	殺生

上の比較から窺えるように、パーリ語と二本の漢訳では寿命の長さについての記述が異なっている。しかしながら、先の引用中二重線で表示した箇所は『中阿含經』のみに見られ、しかも THT404 の記述と一致しているものと推定される。

	[寿命の長さ]	[要因]
『中阿含經』:	80,000 > 40,000	窃盜
THT404:	*80,000 > *40,000	窃盜

トカラ語 B 断片中にこの部分に関する箇所は一部しか残存していないが、『中阿含經』並びに THT404 の双方が「窃盜」の結果として衆生の寿命の減少に言及している事から考えて、『中阿含經』と THT404 がこの点に関して共通した記述を与えていたと推定する事ができよう<sup>14</sup>。また、このような一致は、漢訳『中阿含經』及びトカラ語仏典の部派帰属が同じく説一切有部とされる点と矛盾しない<sup>15</sup>。

<sup>11</sup> THT404a3-6 の部分は破損がひどく対応箇所を確定できないが、パーリ語の *‘dibbaṃ cakka-ratanam’* や漢訳『長阿含經』「金輪寶」及び『中阿含經』「天輪寶」或いはパーリ語の *‘satta ratanāni’* 及び漢訳「七寶」に関連していると思われる。ただし、先行する物語の最後の部分であると推定される THT404a1-2 の記述は現時点では比定できていない。

<sup>12</sup> THT404 の韻文の番号から残存部分の殆どが韻文で書かれている事が窺える。

<sup>13</sup> THT404a2 には梵文による章題がみられる点から、この断片がインド語原典の翻訳であったと推定する事も不可能ではないように思われる。なお、Hartmann and Wille (1992, 1997) 及び SHT によれば、この仏典は西域北道将来梵文写本中には、現在までのところ証されていない。

<sup>14</sup> THT404b6 の記述が『中阿含經』と一致する点も参照。

<sup>15</sup> 漢訳阿含經典の部派帰属については、榎本 (1980 及び 1988) を参照。一方、トカラ語 A 断片 3a1-4a1 (= THT 636-637) に引用される *«Sikhāḷaka-sūtra»* は『中阿含經』ではなく『雜阿含經』のものに近い。なお、この韻

## 2. THT590 について<sup>16</sup>

### 2-1. THT590 のローマ字転写と和訳

ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT590 は、*TochSprR(B)II*: 374-375 によって Nr.590 として初めてローマ字転写が公表された。その際、この断片に対して若干のコメントが付されたものの、恐らくは内容を確定する事が困難であったため「雑多な内容を含む断片 (= *Varia*)」として分類された。その後、この断片についてはその一部が文法研究の際に引用されるに留まり、断片全体を対象とする研究は見られなかった。本節では筆者の調査に基づいて、当該断片の新たな転写と和訳を提出すると同時に、漢訳仏典を参考に当該断片の内容について検討する。

トカラ語 B 断片 THT590 は、断片に付された番号である T III. MQ 17.13 から *Kucha* の *Kizil* で発見された事が窺えるが、その右側は失われている。筆者の調査によれば断片のサイズは横が 24.4 cm・縦は 13cm、使用されている *Brāhmī* 文字は Tamai (2011) の分類では II-1 期に、また言語特徴からは Peyrot (2008) の分類の Classical に属しており、全体は韻文で書かれている。既に述べたように、この断片が出版された際、校訂者の Sieg と Siegling は当該断片に対するコメントで、そのサイズや使用されているトカラ語韻律に関する記述を行うと同時に、内容に関しては「様々な中劫 (= Skt. *antara-kalpa*-) に関する問答<sup>17</sup>」を扱った断片であるとしているが、関連する参考文献などは一切示されていない。

#### [転写]

a

- 1 -- tarya to(m) rano anta[r](akalpanma) ///
- 2 - (e)p(i)ñkte nkelñe ta(n)e mašk.<sup>[11]</sup> /// --- ///
- 3 -- .[ä] kalpānmasa snai --<sup>[2]</sup> (sp)[ā]rttam<sub>1</sub> - ///
- 4 -- p(o) jambudvīpne wnołmy [ā]ly(auce) k. ---<sup>[3]</sup> [k]au(m) šukt<sub>1</sub><sup>[4]</sup> ///
- 5 ---- [ly]ipent<sub>ar</sub><sub>1</sub> 73 śanmaṃ t[e]kiṣṣe antrakalp[o] maṅkte tne ///
- 6 m. ñ.<sup>[5]</sup> sruk(e)nt<sub>ar</sub><sub>1</sub> ce<sub>u</sub> tekisa śāmma [c]ai ‡ wī dvīpanmaṣṣi wī tma(ne)<sup>[6]</sup> ///
- 7 kālp<sub>1</sub><sup>[7]</sup> kesta[ṣṣ]e tarya [dv]īpa(nma) [o]t<sub>1</sub> ce<sub>u</sub> keṣṣa maṅtsent<sub>ar</sub><sub>1</sub> [ṣ]uk[t<sub>1</sub>] [k]aum<sup>[8]</sup> ///
- 8 rya<sup>[9]</sup> tmane ṣ[p]<sub>1</sub> ly(i)pe(nt<sub>ar</sub><sub>1</sub> 7)[5] maṅkte śanmaṃ ot<sub>1</sub> śas(tra)kālp(ṣṣ)e<sup>[10]</sup> ///

b

- 1 yopam su kauno kau[ṣṣ]ṣ. — lyauce —<sup>[11]</sup> po ceṃtṣ<sub>1</sub> ce<sub>u</sub> preke māntal[ñ](e)<sup>[12]</sup> ///
- 2 lmaṅt[ṣ]<sub>1</sub><sup>[13]</sup> 76 [ma]k[t]e lkānta[r] k(a) [ā]lyaucesa wnołmi cai ‡ empele palsk[o] ///

文については、荻原(2009a)を参照。

<sup>16</sup> 本節の内容は、中央アジア学フォーラム (2011年4月2日・於大阪大学) で『ドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT590 をめぐって』というタイトルで行った口頭発表に基づいている。発表後の質疑応答の際に有益なコメントを頂いた榎本文雄大阪大学教授・吉田豊京都大学教授、並びに筆者に発表の機会を与えて下さった荒川正晴大阪大学教授には、特に記して感謝申し上げる。

<sup>17</sup> “Es handelt sich um Fragen und Antworten über die verschiedenen Antarakalpas.” [cf. *TochSprR(B)II*: 374].

- 3 -- [l](a)[r]iyai † kāvālyñeṣṣe ka ṣp\ ñyās\ tseñketar\ āly[au]ce 7(7) ///
- 4 ----<sup>[14]</sup> [s]pelkkesa hwāsa walke rītantar\ keśc[ī] lal(ā)l[o]ṣ\ ///
- 5 -- [a]k[ā]k\ cwī tseñke[tar]\ (78) tu yāknesa [c](emt)[ṣ]\ cew [p](r)e[k](e) ///
- 6 -- [p]r(e)ntse † palsko maiyā(tstse kāwā)lñeṣṣe tse[ñk](etar)\ ///
- 7 - (kau)tsiś\ yau kka [tk]e<sup>[15]</sup> ///
- 8 - (ypa)[r](w)etsane la[m]t[n]ana<sup>[16]</sup> ///

[注釈]

- (1): 文脈から *māsk(etār)* が再建される。
- (2): *TochSprR(B)II*: 374, Anm.8 に従い *snai(keś)* が再建される。
- (3): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.9 は *k(ausentar) †* を推定しているが、筆写は次節に挙げるパラレルを参考に *k(ausentra) † ṣukt* と再建する。
- (4): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.10 では校訂者は後続する語として *epiñkte* ‘for, among’ を推定するが、次節で述べるようにこの部分が漢訳仏典中でのパラレルに一致するなら、残存部分の直後に *epiñkte* を推定する事は妥当ではなく *yṣiye* ‘night’ の複数通格形 *yṣintsa* を推定し<sup>18</sup>、先行する部分と合わせて *ṣukt kauṃ ṣukt yṣintsa* 「七日七夜の間」と韻律の要求する5音節を再建する方が妥当である。
- (5): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.11 に指摘されるように *(te)m(e)ñ<sup>(ā)</sup>* が再建される。
- (6): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.12 に従い *tma(ne ṣpā lyipentar)* を再建する。
- (7): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.12 に従い *(makte śanmām ot\ antara)kāl* を再建する。
- (8): a4 と同様に *TochSprR(B)II*: op.cit. 375, Anm.2 では校訂者は後続する語として *epiñkte* ‘for, among’ を推定するが、漢訳仏典中でのパラレルに一致するなら残存部分の直後に *epiñkte* を推定する事は妥当ではなく、*ṣukt kauṃ ṣukt yṣintsa* 「七日七夜の間」と再建する方が妥当である。ただし、この後に続く部分を推定する事は困難である。
- (9): *TochSprR(B)II*: 375, Anm.2 に従い *(ta)rya* を再建する。
- (10): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.3 に従い *(preke)* を再建する。
- (11): この部分は原文書において抹消されている。
- (12): 或いは *māntal(y)[ñ](e)* が再建される可能性も排除されない。
- (13): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.5 に指摘されるように *(oñko)lmamṭ[ṣ]* 「象達の」を再建する。この部分は或いは *(ono)lm(e)mt[ṣ]* 「人々の」の書き誤りである可能性もある。
- (14): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.8 に従い *(† makte)* を再建する。
- (15): *TochSprR(B)II* ではこの部分を *yaukka[t]e [k](e)* としているが、断片には転写に示したように書かれており、そのままでは解釈できない<sup>19</sup>。仮に *TochSprR(B)II* にあるように訂

<sup>18</sup> これまでトカラ語 B の *yṣiye* ‘night’ の複数形は指摘されていないが、未出版のドイツ所蔵トカラ語 B 断片 THT1460 frg.a.b5: /// - wāntare [ṣka]ṣ[ly] y[ṣ]intsa /// が梵文《*Bhikṣu-prātimokṣasūtra*》: *ṣaḍrātraparamam* に対応する事から *yṣim\** が複数斜格形と推定される。なお、この断片は Ogihara (2009b: 49 及び 211-213) で扱った。

<sup>19</sup> 最初の 2 akṣara を *yaukka* と見做し、語根 *yaukk-* ‘to use’ の三人称単数・過去形・能動態と解釈する事も不可能ではないが、この語根にはこれまで能動態の形式は知られていない。

正されるならば、パラレルを参考に *yaukka[t]e [k](ertte)* と推定される。

(16): *TochSprR(B)II*: op.cit. Anm.14 に従い再建した。先行する語は形容詞 *yparwetstse* ‘previous’ の双数形主格・斜格形と解釈されるが、後続する語形は解釈が困難である。Adams (1999: 544) はこの語形を語義不明の語である *lant\** の複数形と解釈すると同時に、先行する形容詞を *yparwetsana* とする訂正も提示している。ただ、先行する語が *TochSprR(B)II* にあるように *(ypa)[r](w)etsane* と推定されるか否かは議論の余地があり、定かではない。

[和訳]

a

- 1 /// また、これらの三つの中劫 ///
- 2 /// ... の間 ... 、ここに滅びる。///
- 3 /// 我々は無限の劫の間廻り続けるだろう。///
- 4 /// 瞻部洲の全ての人々がお互いに(殺し合う。七日七夜) ///
- 5 /// ... が残る。{73} 病気の劫が訪れる時、///
- 6 /// ... この病気のために、これらの人々は死ぬ。(そして)、二つの洲の二万の(人々が残る。) ///
- 7 /// 飢饉の(中劫が訪れる時)、その時三つの洲はこの飢饉によって飢える。七日(七夜) ///
- 8 /// そして三万人が残る。{75} 刀兵の劫(の時)が訪れると、///

b

- 1 /// ~~お互いに殺し合う目に入ると~~、この時、彼らは皆悪意(を抱く)。///
- 2 /// 象達の ... 。{76} これらの人々はお互いを見ると、恐ろしい考え(を抱く) ///
- 3 /// 愛しい ... 。そして、殺そうという欲望がお互いに生じる。{77} ///
- 4 /// 飢えに苦しんだ人々が長い間必死に動物を求めように ///
- 5 /// 彼に望みが生じる。(78) このように、この時彼らに ///
- 6 /// 本当の ... 。殺したいという大いなる望みが(生じる) ///
- 7 /// (殺す)ために彼は刀を使った(?)。///
- 8 /// 以前の(?) ... ///

## 2-2. 内容の検討

前節では THT590 の和訳を提示したが、この断片の内容は以下のように要約できよう。

a1: 三種類の中劫の存在<sup>20</sup>; a4-5: 刀兵; a5-6: 疾疫; a7-8: 飢饉  
a8-b7: 刀兵

上に見たように、この断片の始めの部分には三種類の中劫の存在が指摘され、それに続

<sup>20</sup> 刀兵 [= Skt. *śastra*-]・疾疫 [= Skt. *roga*-]・飢饉 [= Skt. *durbhikṣa*-]。

く部分では三種類の中劫のそれぞれに関する言及が見られる。その後、recto の最終行から verso 全体にかけて、再び中劫の一つである「刀兵」について詳細な記述が確認される。このような構成から見て、この断片は三種類の中劫の存在とその内訳及び中劫のそれぞれについての解説から成っていたのではないかと推定される。

## 2-2-1. パラレルについて

前節でみたように、THT590 は「三種類の中劫」に関する叙述と解説であると推定された。筆者の調査では、この断片の内容理解に資する漢訳仏典として以下のものを挙げる事ができるが、これらの文献は論書と阿含經典の二つに大きく分類される<sup>21</sup>。

### [A]: 論書

『阿毘達磨大毘婆沙論』 卷 134 (T.27, no.1545, 693a7-b16)

『雜阿毘曇心論』 卷 11 (T.28, no.1552, 959b17-c21)

『阿毘達磨俱舍論』 卷 12 (T.29, no.1558, 65c19-66a26)<sup>22</sup>

『阿毘達磨順正理論』 卷 32 (T.29, no.1562, 526a27-c4)

『阿毘達磨藏顯宗論』 卷 17 (T.29, no.1563, 858c1-23)

『佛説立世阿毘曇論』 卷 9 (T.32, no. 1644, 215b5-221a22)<sup>23</sup>

『瑜伽師地論』 卷 2 (T.30, no.1579, 285c12-286b3)<sup>24</sup>

### [B]: 阿含經典

『長阿含經』 卷 22, 「三中劫品」 (T.01, no.1, 144a19-145a3)<sup>25</sup>

『起世因本經』 (T.01, no.25, 408b25-409b14)

『世記經』 (T.01, no.24, 353, b22-354b10)

『大樓炭經』 (T.01, no.23, 302a24-c16)

## 2-2-2. パラレルとの比較

本節では前節で挙げたパラレルと THT590 との比較を行うが、THT590 は全体が残っていないため比較に有効と思われる箇所のみ確認する。

### (A) 三種類の中劫の順序

THT590 には三種類の中劫が言及されており、その内訳はその他のものと同一であるが、順序は異なっている<sup>26</sup>。

<sup>21</sup> 梵文及びチベット語仏典については、越後屋 (2009: 217 [32]) を参照。

<sup>22</sup> Pradhan (1967) による梵文では pp.187.20-188.23 に対応する。

<sup>23</sup> 岡野 (1998) によると、部派帰属は正量部とされている。

<sup>24</sup> Bhattacharya (1957) による梵文では pp. 32.7-35.12 に対応する。また、関連する記述として『瑜伽師地論』 卷 44 (T.30, no.1579, 537c29-538b12) も参照されたい。

<sup>25</sup> 漢訳『長阿含經』の所属部派は法藏部とされている。なお、漢訳阿含經の所属部派については、榎本 (1988) を参照。

<sup>26</sup> 梵文及びチベット語仏典も含めた比較については、越後屋 (2009: 212 [37]) を参照。

THT590: 刀兵、疾疫、飢饉

= 『阿毘達磨大毘婆沙論』・『雜阿毘曇心論』・『阿毘達磨俱舍論』・『阿毘達磨順正理論』・『阿毘達磨藏顯宗論』

≠ 『佛說立世阿毘曇論』: 疾疫・刀兵・飢饉

≠ 『瑜伽師地論』: 儉・病・刀

≠ 「世記經類」: 刀兵劫・穀貴劫・疾疫劫

この対応関係は以下のように纏められる<sup>27</sup>。

THT590:	刀兵	疾疫	飢饉
婆沙論:	刀兵	疾疫	飢饉
阿毘曇論:	疾疫	刀兵	飢饉
師地論:	儉	病	刀
世記經:	刀兵	穀貴	疾疫

このように、THT590 における中劫の順序は『阿毘達磨大毘婆沙論』等の有部系論書とは一致するものの、『瑜伽師地論』・『佛說立世阿毘曇論』・「世記經」とは一致しない。

### (B) 中劫の続く期間

各中劫の続く期間に関する記述が THT590 にも若干残存しており、それらを比較すると以下ようになる。

	[刀兵]	[疾疫]	[飢饉]
THT590:	七日七夜(?)	×	七日七夜(?)
婆沙論:	七日七夜	七月七日七夜	七年七月七日七夜
阿毘曇論:	七日	七日	七日
師地論:	七日七夜	七月七日七夜	七年七月七日七夜
世記經:	七日	無	無

THT590 は各中劫についての正確な記述を欠いており、その他の文献との対照が困難であるが、「刀兵・飢饉」の二つについては期間の記述が見られる事から、本来は「疾疫」に対しても期間に関する記述が存在していたと考えられる。この点から見れば、少なくとも THT590 は「刀兵」のみ期間に言及する「世記經」とは一致していないと言える<sup>28</sup>。

<sup>27</sup> 所説が同じである場合、特に断らない限り以下の対照表においては、『阿毘達磨大毘婆沙論』を以て『雜阿毘曇心論』・『阿毘達磨俱舍論』・『阿毘達磨順正理論』・『阿毘達磨藏顯宗論』も代表させる。

<sup>28</sup> 越後屋 (2009: 213-212 [36-37]) によれば、三中劫の配置の順番の相違が部派間で意識されていたという。

### (C) THT590 に見られる記述

THT590 には他文献には見られない記述が見られる。それは第一節で与えた和訳中波線で示した箇所であり、以下ではこれらの部分を検討する。なお、[ ]の部分は当該記述が見られる中劫である。

- a6: 二つの洲の二万の(人々が残る) [疾疫]
- a7: その時三つの洲はこの飢饉によって飢える。 [飢饉]
- a8: そして三万人が残る。 [飢饉]
- b4: 飢えに苦しんだ人々が長い間必死に動物を求めるように (以下欠) [刀兵]

上の引用の内、各中劫で残る人々の数に言及する a6, 8 については『阿毘達磨大毘婆沙論』と『佛説立世阿毘曇論』に対応する記述が見られるのみで、その他の文献では言及されない。ただし、『阿毘達磨大毘婆沙論』の記述は、THT590 とは異なり具体的な人数の指定はなく「瞻部洲内纔餘萬人。」(T.27, no.1545, 693a18-19 及び 693b5-6) とするのみであり、また『佛説立世阿毘曇論』は「剌浮提内男女。唯餘一萬留為當來人種。」(T.32, no.1644, 216b12-13) と具体的な数を記すものの、THT590 とは一致しない。

一方、a7 の「三つの洲」という記述は具体的にどの「洲」を指しているのか、ここでは確定できないが、他の文献には見られない<sup>29</sup>。

また、b4 の「刀兵劫」での比喻は、有部系論書の「如今獵師見野禽獸隨手所執皆成刀杖。各逞凶狂互相殘害。」(T.27, no.1545, 693a11-12) や『佛説立世阿毘曇論』「或時仆地譬如鬻鹿遭逢獵師。」(T.32, no.1644, 218b1-2) 及び『長阿含經』「猶如獵師見彼群鹿，但欲殺之。」(T.01, no.1, 144b9) という比喻とは異なっている。

以上に行った比較から、THT590 は有部系の『阿毘達磨大毘婆沙論』の所説に最も近いとは言えるものの、異なる記述も含んでいる事を指摘する事ができる。ただ残念ながら、現時点では筆者は THT590 が依拠した所説の来源を特定する事には成功していない<sup>30</sup>。

なお、ここで扱った断片には三種類の中劫が扱われていたが、先に取り上げた THT404 に対応すると推定される漢訳『中阿含經』「轉輪聖王修行經」にも、三種類の中劫の内「七日刀兵劫」に関する言及が見られる。THT404 はこの經典の刀兵劫に関する記述に先行する

---

この説に従えば、THT590 に述べる順序は有部系論書のものと同じであるため、三中劫の継続する期間に関する記述も THT590 は有部系論書のものと同じであった可能性が指摘されるが、「飢饉」についてはトカラ語 B 断片に見られる記述から、有部系の所説とは異なっていた可能性も排除されない。

<sup>29</sup> 所謂四大洲と呼ばれる南瞻部洲 (= Skt. *Jambudvīpa*-)・東勝身洲 (= Skt. *Pūrvavideha*-)・西牛貨洲 (= Skt. *Godānīya*-)・北俱盧洲 (= Skt. *Uttarakuru*-) の内、北俱盧洲を除く残りの三つである可能性が指摘される。『阿毘達磨俱舍論』卷 17 「言三洲者。除北俱盧。」(T.29, no.1558, 89a29-b1) を参照。一方、a6 の「二つの洲」は東勝身洲 (= Skt. *Pūrvavideha*-) と西牛貨洲 (= Skt. *Godānīya*-) の二つではないかと推定される。

<sup>30</sup> 百濟 (1972) によると、トカラ語 B «*Udānālaṅkāra*» に見られる阿毘達磨的註解はカシミール系正統派有部に属するとされている。この比定に基づけば、THT590 の所説はカシミール系有部のものと推定されるが、その場合カシミール系有部の内部に異なるテキストが流通していた事になる。



場面であり、THT404 を含めた写本ではどのような記述を与えていたか明らかにする事はできないが、「三種類の中劫」は仏教の世界観を構成する概念であるため、これらの断片の存在からトカラ仏教にも説一切有部系の仏教の世界観が伝えられていた事を窺う事ができる<sup>31</sup>。なお、以下には THT590 と所説が最も近い『阿毘達磨大毘婆沙論』の関連部分を引用し参考に供したい。

#### 『阿毘達磨大毘婆沙論』

「如彼大劫有大三災。如是中劫小三災現。一刀兵。二疾疫。三飢饉。初刀兵劫將欲起時。瞻部洲人極壽十歲。為非法貪染汚相續。不平等愛映蔽其心。邪法縈纏瞋毒增上。相見便起猛利害心。如今獵師見野禽獸隨手所執皆成刀杖。各逞凶狂互相殘害。七日七夜死亡略盡。瞻部洲內纔餘萬人。各起慈心漸增壽量。爾時名為度刀兵劫次疾疫劫將欲起時。瞻部洲人極壽十歲。由具如前諸過失故。非人吐毒疾疫流行。遇輒命終難可救療。都不聞有醫藥之名。時經七月七日七夜。疾疫流行死亡略盡。瞻部洲內纔餘萬人。各起慈心漸增壽量。爾時名為度疾疫劫。後飢饉劫將欲起時。瞻部洲人極壽十歲。亦具如前諸過失故。天龍忿責不降甘雨。由是世間久遭飢饉。由飢饉故便有聚集。白骨運籌三種言異。由二因故名有聚集。一人聚集謂彼時人。由極飢羸聚集而死。二種聚集。謂彼時人為益後人。輟其所食置於小篋。擬為種子故飢饉時名有聚集言。有白骨亦由二因。一彼時人身形枯燥。命終未久白骨便現。二彼時人飢饉所逼。聚集白骨煎汁飲之。有運籌言。亦二因故。一由糧少傳籌食之。謂一家中從長至幼隨籌至日得少匱食。二謂以籌挑故場蘊得少穀粒多用水煎。分共飲之以濟餘命。如是飢饉經七年七月七日七夜。飢饉所逼死亡略盡。瞻部洲內纔餘萬人。各起慈心漸增壽量。爾時名為度飢饉劫。此三災橫雖復難除。然有聖言說彼對治。謂若有能一日一夜持不殺戒。於未來生決定不逢刀兵災起。若能以一訶梨怛鷄。起殷淨心奉施僧眾於當來世決定不逢疾疫災起。若有能以一搏之食起殷淨心奉施僧眾。於當來世決定不逢飢饉災起。問如是三災餘洲有不。答無根本災。而有相似。謂瞋增盛身力羸劣數加飢渴。此說二洲。北拘盧洲亦無相似。以無罪業而生彼故。又彼無有瞋增盛故。」

(T.27, no.1545, 693a7-b16)

### 3. THT1550 について

#### 3-1. THT1550 の転写と和訳

ドイツ所蔵トカラ語断片 THT1550 はトカラ語 B によって表裏共に 6 行ずつ書かれている断片であり、写真は現在 TITUS 及び IDP で公開されている。ただ、公開されている写真は筆写の研究によれば表裏が反対である。断片のサイズは横 13.4cm・縦 7.5cm であるが、新たに裏と判断された面の 1 行目は断片が破損しており、殆ど解読できない。また、当該断片には発見場所として T III MQR と記されている事から、Kizil で発見された事が窺える。写真から断片には罫線が書かれていた事が明らかであり、罫線の間隔は約 1.3cm である。

<sup>31</sup> THT590 が「三種類の中劫」に関する叙述と解説から成っていると見られる点については既に言及したが、この断片がある特定の仏典に対する註釈文献であったか、或いは何らかの原典からの翻訳であるか、といった点については明らかにする事ができない。なお、トカラ語仏典中に註釈文献が存在していたと見られる点については、笠井 (2004, 2006) を参照。

この断片は言語面から見ると、Peyrot (2008) で定義されるところの Classical Tocharian B に分類され、所謂 Late Tocharian B の特徴は確認されない。一方、断片の書写に使用されている *Brāhmī* 文字は、Tamai (2011) の枠組みに従えば II-1 期に分類する事が可能であろう。また、断片に見られる番号や punctuation から当該断片は全体が韻文で書かれている事が明らかであり、ここには strophe 2d-12a が含まれている。そのため、この韻律が要求する音節数を利用する事により、断片に残存している部分が本来の folio のどの程度に相当するかを判断する事が可能であるが、これらの点については転写及び和訳を提示した後に論ずる事とする。筆者の研究によると、この断片は『中阿含經』「四洲經」に語られる *Māndhātṛ* 王の物語に比定される。なお、以下に挙げる転写は本来の表裏に戻した状態で提示している。

[転写]

a

1 /// n(au)ṣ<sub>1</sub> ṣ[e]yem̄ wnołmi c[e]w pr[e]ke 2 alyek preke nan(o) [s](e) wa[lo] ///

2 /// [tu] yāknesa po wnołme[m̄] yātate<sup>[1]</sup> se yetwentsa 3 k<sub>u</sub>ce nai [wno](lmi) ///

3 /// .ār<sub>1</sub> yamaskem̄ pokse n̄i twe ce wāntre [‡] amāc<sup>ā</sup><sub>1</sub> [tu] – ///

4 /// w[e]s no skwassoñc<sup>ā</sup><sub>1</sub> m̄skemtrā [‡] nu[skā]<sup>[2]</sup> palsko lānte – ///

5 /// – swāsoy<sup>ā</sup><sub>1</sub> śātre akāśmeṃ naśi[m̄](<sub>1</sub>)<sup>[3]</sup> lakle [o]n[o]lme(m̄ts)<sub>1</sub> [ ] ///

6 /// – .ai ..m̄ – m(.e) .au m.e s(e wa)[lo] – – [p](a)l(sk)o w(n)o ///

b

1 [illegible]

2 /// – n(<sub>1</sub>) pokseñ [n]ai k<sub>u</sub>ce tam<sub>1</sub> klaina yamaskem̄ 8 amā(c<sup>ā</sup><sub>1</sub>) ///

3 /// [m](e)m̄ tsañkau se wes no skwassoñc<sub>1</sub> keklyutkoṣ<sub>1</sub> ‡ walo .[l]. ///

4 /// [r]nts(e) oko [s]u maiyya ākṣi n̄i n̄ake ‡ kalpa –<sub>1</sub> ///

5 /// .[i]ya wnołmeṃts<sub>1</sub> tsañka n̄yās<sub>1</sub> rmamñe ‡ lānte ersna lk(ā) ///

6 /// ka[kā]nte<sup>[4]</sup> yarkeśc<sub>1</sub> ‡ 11 walo lyāka onol[m]e[m̄] mā [tu] – ///

[注釈]

(1): この形式は初出であり Malzahn (2010: 785-786) では指摘されていないが、語根 *yāt-* ‘to be (ca)pable’ の三人称単数・過去形・中動態である。欠落している部分には動詞の不定詞形が先行していたと推定される。

(2): この語形も初出であり、現在までに知られている動詞変化の類型にはこの語形に一致する形式を見出す事はできない。筆者は文脈と形態論的特徴から、この語形を語根 *nusk-* ‘to (de)press’ (Malzahn op.cit.: 690-691) の Grundverb の活用形と見做し、三人称単数・過去形・能動態であると解釈する。即ち、これまで語根 *nusk-* ‘to (de)press’ は他動詞の用例のみが知られていたため、この語根に属する既知の形式が Kausativ と認識される事はなかったが、当該断片に在証される語形は過去形第 I 類の三人称単数・過去形・能動態であるとする解釈が妥当である。そのため、語根 *nusk-* の過去形について、Grundverb

は過去形第 I 類、Kausativ は過去形第 III 類が設定されるべきである。なお、この語根の Grundverb の意味は‘to be depressed’と推定される。

- (3): この語形も初出であるが、語根 *nāk-* ‘to destroy’の一人称単数・願望法・能動態である。なお、同じく三人称単数形 *naṣi* も THT1419.frg.g.b4: *k<sub>u</sub>ce mā naṣi* に在証される。
- (4): 初出語形であるが、語根 *kwā-* / *kāk-* ‘to call, invite’の三人称複数・過去形・中動態である。先行する部分には目的語としてこの物語の主人公である「王」が推定される。

[和訳]

a

- 1 // 以前 ... 人々はこの時 ... だった。{2} また或る時、かの王は //
- 2 // そのように彼は全ての人々を莊嚴によって ... する事ができました。人々は何を //
- 3 // 彼らは ... を行っている。お前は私にこの事について語れ。大臣はその事 //
- 4 // しかし私達は幸せです。王の心は落胆しました。... //
- 5 // 空から穀物が降りますように。私は人々の苦しみを取り除く事ができますように。 //
- 6 // ... かの王は ... 人々の心<sup>[1]</sup> ... //

b

- 1 [判読不能]
- 2 // ... あそこで女性達が何を行っているか、私に言いなさい。{8} 大臣は //
- 3 // 彼は ... から立ち上がりました。私達は今幸せになりました。王は ... //
- 4 // それは ... 行いの果報です<sup>[2]</sup>。今、彼は私にその力について説かれますように。...<sup>[3]</sup> //
- 5 // ... 人々には願望が生じました<sup>[4]</sup>。王の姿を見て<sup>[5]</sup> //
- 6 // 彼らは敬意を表するため ... を招きました。{11} 王は人々を見ました。...<sup>[6]</sup> //

[注釈]

- (1): 具体的な形式は確定できないが、ここには *wnolme* ‘(living) being’が推定される。
- (2): 断片の残存部分と文脈から *yāmor* ‘action, deed’の単数属格形が推定される。この部分は、主人公の王が自らの臣民に誰のおかげで恩恵を受けたかを尋ねた際の回答に相当するものと考えられ、梵文«*Māndhātāvadāna*»: *sa ca rājā kathayati: kasyaitāni puṇyāni. yatas te kathayanti: devasya cāsmākaṃ ca.* (Vaidya 1959: 131.27, 132.01, 05, 09) に対応すると見られるが、通常梵語 *puṇya-* ‘meritorious act’ (MW: 632a) に対応するトカラ語 B: *yarpo* をこの箇所推定する事は、断片に残存している部分から見て妥当ではない。
- (3): 後続する部分が欠けており文脈を確定できないため確実な推定を行う事はできないが、恐らく *kalpa* は語根 *kālp-* ‘to obtain’の三人称単数・過去形・能動態であり、その後には *ṣ* ‘and’が *virāma* で結ばれていたものと考えられる。
- (4): 和訳文中「願望」と訳した語はトカラ語 B の *ñyās* ‘desire’及び *rmamñe* ‘tendency’である。ここでは、この二語が *hendiadys* となっているものと解釈した。
- (5): ここには恐らく語根 *lāk-* ‘to see’の三人称複数・現在形である *lkāskem* が推定される。た

だし、同じ語根の不定詞 *lkātsi* である可能性も排除されない。

- (6): 断片には *mā* 及び *tu* が確認され、前者を否定辞に、後者を代名詞中性形と見做す事は可能であるが、後続する文脈が不明なためここでは訳を与えない。

### 3-2. THT1550 の韻律について

前節の断片の紹介で言及したように、当該断片は全体が韻文で書かれている。現在確認できる部分は本来の *folio* の一部であるが、残された部分の分析の結果、当該断片で使用されている韻律は 4 行×14 音節 [= 7/7] である事が明らかとなった。この韻律に従って *Pāda* を区切った形式で断片を提示すると、下記のようなになる。なお、ここでは閲読の便宜を考慮し、転写の際に使用した [ ] 及び ( ) は基本的に省略する。

a

- 1 /// nauš † şeyem wnołmi cew preke {2} alyek preke nano se † walo ///  
2 /// † tu yāknesa po wnołmem † yātate se yetwentsa {3} k<sub>a</sub>ce nai wnołmi ///  
3 /// .ār yamaskem † pokse ñi twe ce wāntre † amāc tu - ///  
4 /// † wes no skwassoñc māskemtrū † nuska palsko lānte - † ///  
5 /// - † swāsoy šātre akāśmem † naśim lakle onolmeṃts † ///  
6 /// - .ai ..ṃ - m(.e) .au m.e se walo - - palsko wno ///

b

- 1 [illegible]  
2 /// - n pokseñ nai † k<sub>a</sub>ce tamp klaina yamaskem {8} amāc ///  
3 /// mem tṣaṅkau se † wes no skwassoñc keklyutkoš † walo .l. ///  
4 /// rntse oko su † maiyya ākṣi ñi ñake † kalpa - ///  
5 /// .iya † wnołmeṃts tsaṅka ñyās rmamñe † lānte ersna lkā ///  
6 /// kakānte yarkeśc † {11} walo lyāka onolmem † mā tu - ///

上で推定した韻律では一つの韻文に 56 音節が要求される。この形式に従って当該断片に残存している音節数を確認すると、最も多い行で 18 音節、最も少ない行では 14 音節である。また、断片の表 1-2 行目も参考にすると、当該断片は本来の *folio* の紐穴の右側の部分にあたり、全体の三分の一弱に相当すると考えられる。

### 3-3. THT1550 の比定について

本節では先に和訳を提示した THT1550 の比定を行う。断片には物語の主人公の名前は確認されないが、関連する記述を根拠に当該断片は『中阿含經』「四洲經」及び『增壹阿含經』に語られる *Māndhātṛ* 王の物語に比定される<sup>32</sup>。ただし、この物語は漢訳『頂生王故事經』・

<sup>32</sup> 檜山 (2010, 2012) が指摘するように、この物語は *Kizil* 石窟第 118 窟の壁画にも描かれているだけでなく、発見場所は *Kucha* ではないが、梵文断片 SHT558 + 1162, 982 がこの物語に比定されており、西域北道一帯

『文陀竭王經』・『頂生王因緣經』など単行の仏典としても知られる他、梵文«Divyāvadāna»所収«Māndhātāvadāna»及び『賢愚經』「頂生王品」・『六度集經』「頂生聖王經」といった本縁部の作品にも収められており、阿含經典の断片と確定する事はできないが、ここでは『根本説一切有部毘奈耶藥事』卷12に『中阿笈摩王法相應品』に相当する部分として引用されている事 (T.24, no.1448, 56b11-12) から暫定的に阿含經典に関連づけている。

なお、この物語に関連する作品は梵文・パーリ・漢文・藏文に幅広く見られるため、これら全ての作品を列挙する事は控え、ここでは THT1550 を解釈する上で関連する記述が見られるもののみを挙げる<sup>33</sup>。

[梵文]

«Divyāvadāna» 第17章 «Māndhātāvadāna» (Vaidya 1959: 125-141)<sup>34</sup>

[漢訳]

『頂生王因緣經』 (T.03, no.165, 393a9-394b25)

『賢愚經』卷12「頂生王品」 (T.04, no.202, 439b25-440c15)

以下、THT1550 の内容理解に貢献する部分を引用するが、引用文中トカラ語 B 断片に関連する部分を梵文については bold 体で、漢訳仏典については下線で表示する。

[梵文]

«Divyāvadāna»

*rājño mūrdhātasyāmātyāś cintakās tulakā upaparīkṣakāḥ. cintayitvā tulayitvopaparīkṣya pṛthag pṛthag utkāḥ śilpasthānakarmasthānāni māpayitum. cintakā ime tulakā upaparīkṣakā iti mantrajā mantrajā iti samjñā. tair ārabdhāni karṣaṇakarmāṇi kartum. yataḥ sa rājā paśyati janapadān anusaṃsāryākṣyān karmāntān kurvataḥ. yato rājñā abhīhitam: kim ete manuṣyāḥ kurvanti. tatas tair amātyai rājā abhīhitaḥ: ete deva manuṣyāḥ śasyādīni kṛṣanti, tato ośadhayo bhaviṣyanti. yataś ca sa rājā kathayati: mama rājye manuṣyāḥ kṛṣiṣyanti. tatas tenoktam: saptāviṃśatibḥajātīnām devo varṣatu. saḥacittotpādād eva rājño mūrdhātasya saptāviṃśatibḥajātīr devo vṛṣtaḥ. rājñā mūrdhātena janapadāḥ pṛṣtāḥ: kasyaitāni puṇyāni. tair abhīhitam: devasya cāsmākaṃ ca. yatas te manuṣyāḥ karpāsavātān ārabdhā māpayitum, bhūyo 'pi ca rājñā mūrdhātena*

---

でこの物語が受容されていた事が窺える。

<sup>33</sup> Māndhātṛ 王物語のパラレルについては檜山 (2010: 370, fn.26; 2012: 155, ft.16) 及び八尾 (2012: 292-293 及び 2013: 302, fn.1) を参照。

<sup>34</sup> 八尾 (op.cit.) に指摘されるように、梵文及び漢訳『根本説一切有部毘奈耶藥事』にはこの物語が省略された形で引用されているが、藏文では全文が引用されている。そのため、ここでは梵文『根本説一切有部毘奈耶藥事』を引用しない。また、藏文『藥事』と«Divyāvadāna»所収の物語はほとんど差異がないため引用を控える。藏文『藥事』の和訳については、八尾 (2013: 304-305) を参照。なお、THT1550 の内容は Gilgit から回収された梵文及び漢訳の『藥事』には見られず、藏文『藥事』にのみ見られる事から、当該断片は前者とは異なる系統に由来すると推定される。

janapadān anusamsārya tena prṣṭāḥ. **tato rājñā abhihitam: kim ete manuṣyāḥ kurvanti. tair amātyair abhihitam:** deva, manuṣyāḥ karpāsavātān māpayanti. paścāt rājñā abhihitam: kasyārthe. tair amātyair abhihitam: deva, vastrāṇām arthe. tato rājñā tenoktam: mama rājye manuṣyāḥ karpāsavātān māpayiṣyantīti karpāsam eva devo varṣatu. saḥacittotpādād eva rājño mūrdhātasya karpāsān eva devo vṛṣṭaḥ. **sa ca rājā janapadān prcchati. kasyaitāni puṇyāni. te kathayanti: devasya cāsmākaṃ ca.** paścāt tena janena tat karpāsaṃ kartitum ārabdham. **sa rājā kathayati: kim ete manuṣyāḥ kurvanti. tair amātyair abhihitam:** deva sūtreṇa prayojanam. tato rājñā abhihitam: mama rājye manuṣyāḥ kartiṣyanti. sūtram eva devo varṣatu. saḥacittotpādād eva rājño māndhātasya sūtram eva devo vṛṣṭaḥ. **sa ca rājā kathayati: kasyaitāni puṇyāni. yatas te kathayanti: devasya cāsmākaṃ ca.** yatas tair anupūrveṇa vastrāṇy ārabdhāni vāpayitum. **sa rājā kathayati: kim ete manuṣyāḥ kurvanti. tair amātyair abhihitam:** deva, vastrāṇi vāpayanti, vastraiḥ prayojanam. yato rājā saṃlakṣayati: mama rājye manuṣyā vastrāṇi vāpayiṣyante. vastrāṇy eva devo varṣatu. saḥacittotpādād eva rājño māndhātasya vastrāṇy eva devo vṛṣṭaḥ. **sa rājā kathayati: kasyaitāni puṇyāni. te kathayanti: devasya cāsmākaṃ ca.** yataḥ sa rājā saṃlakṣayati: manuṣyā mama puṇyānāṃ prabhāvaṃ na jānanti. atha rājño māndhātasyaitad abhavat. asti me jambudvīpa rddhaś ca sphītaś ca kṣemaś ca subhikṣaś ca ākīrṇabahujanamanuṣyaś ca. santi me sapta ratnāni, tad yathā cakraratnaṃ hastiratnaṃ aśvaratnaṃ maṇiratnaṃ gṛhapatiratnaṃ strīratnaṃ pariṇāyakaratnaṃ eva saptamam. pūrṇaṃ ca me sahasraṃ putrāṇāṃ śūrāṇāṃ vīrāṇāṃ varāṅgarūpiṇāṃ parasainyapramardakānāṃ. aho bata me 'ntaḥpure saptāhaṃ hiraṇyavarṣaṃ patet, ekakārṣāpaṇo 'pi bahir na nipatet. saḥacittotpādād eva rājño māndhātasyāntaḥpure saptāhaṃ hiraṇyavarṣaṃ vṛṣṭam. ekakārṣāpaṇo 'pi bahir na nipatito yathāpi tanmaharddhikasya sattvasya mahānubhāvasya kṛtapuṇyasya kṛtakuśalasya svakaṃ puṇyaphalaṃ pratyānubhavataḥ. **yataḥ sa rājā kathayati: kasyaitāni puṇyāni. te kathayanti: devasya cāsmākaṃ ca.** yato rājā mūrdhātaḥ kathayati: kṣuṇṇā bhavanto yadi yuṣmābhiḥ pūrvam evābhihitam abhaviṣyad devasya puṇyānīti, mayā sakalam jambudvīpaṃ ratnair abhivṛṣṭam abhaviṣyat. api tu yo yuṣmākaṃ ratnair arthī, sa yāvad īpsitāni ratnāni gṛhṇātu. (Vaidya 1959: 131.20-132.20)

[漢訳]

『頂生王因緣經』

「爾時，頂生王漸次思惟觀察稱量人間所宜種種事業，隨所思惟觀察稱量已，各各發起人間所有種類事業。其王出行初見人間耕植田里，見已乃問諸侍臣言。此人所作名為何等。臣白王言。天子。此人耕耨其田、植諸種子，隨所滋長而為活命。王言。我為聖王，何假人間耕植滋養，自有天中種子生成。彼頂生王纔言念時，有二十七類種子自天而降。其王即問諸人眾言。此由何人福力所致。人眾答言。此由天子福力亦兼我等。

復次，彼王漸行，又見農人種蒔氎衣種子，見已乃問諸近臣言。此人所作名為何等。臣白王言。天子。此人種蒔氎華樹種，結實取綿可成氎衣。王言。我為聖王，何假人間植氎衣種，

自有天中妙氎種子。纔言念時，妙氎衣種自天而降。其王即問諸人眾言。此由何人福力所致。人眾答言。此由天子福力亦兼我等。

復次，彼王漸行，又見農人紡氎衣線，見已乃問諸近臣言。此人所作名為何等。臣白王言。天子。此人取綿紡線將成氎段。王言。我為聖王，何假人間如是造作，自有天中妙氎所用。纔言念時，妙氎衣緣自天而降。其王即問諸人眾言。此由何人福力所致。諸人眾言。此由天子福力亦兼我等。

腹次，彼王漸行，又見農人次第織氎衣段，見已乃問諸近臣言。此人所作名為何等。臣白王言。天子。此人布設機杼織氎衣段。王言。我為聖王，何假人間氎衣被身，自有天中妙氎衣飾。纔言念時，上妙氎衣自天而降。其王即問諸人眾言。此由何人福力所致。諸人眾言。此由天子福力亦兼我等。

爾時，頂生王見是事已，乃起思念。我之福力，今於此間未能顯發。我已統治須彌山南外大海中此瞻部洲，其內廣闊外如車形，人民熾盛安隱豐樂。又復國土城邑嚴麗，所居人眾妙色可觀。我有七寶。所謂輪寶、象寶、馬寶、摩尼珠寶、玉女寶、主藏神寶、主兵神寶，如是七寶皆悉具足。及有千子最上色相，勇猛無畏能伏他軍，若我有勝力者快哉。今時願我宮中雨金錢七日，乃至不使一錢墮於宮外。王纔念時，即於宮中天雨金錢數滿七日，無一金錢墮於宮外。隨其所作善根福力，神通威德自受福果。其王即問諸人眾言。此由何人福力所致。諸人眾言。天子福力。王言。如汝向說兼汝等力，何故今時天不雨金滿瞻部洲，使一切人民隨所欲者，悉能取之，故知汝等宿因微歎。」 (T.03, no.165, 393c21-394b10)

#### 『賢愚經』

「巡行國界，見諸人民，墾地耕種。王問臣吏。此諸群生，欲作何等。便答王言。有形之類，由食得存，是以種穀，欲以濟命。王立誓言。若我有福應為王者，當有自然百味飲食，充飽一切，使無飢渴。作願已竟，尋有飲食。王更出遊，見諸人民，紡績經織。王復問言。作此用為。諸人對曰。食已自然，無以嚴身，是故紡織用作服飾。王復立誓。若我有福應為王者，當有妙衣自然而出，賑給萬民，使無窮乏。作願已竟，應時諸樹悉生種種異色妙服，一切人民，求得無盡。王更出遊，見諸群黎，修治樂器。王因問之。作此何為。諸人報言。衣食既充，乏於音樂，所以治此，欲用自娛。王復立誓。若我有福應為王者，眾妙樂器，當自然至。作願適竟，應時諸樹，若干種種伎樂，懸在其枝，若有須者，取而鼓之，音聲和暢，其有聞者，無不歡預。王德至重，萬善臻集，天雨七寶，遍諸國界。王問諸臣。此誰之德。諸臣對曰。此是王德，亦國民福。王復立誓。若是民福，寶當普雨。若獨我德，齊雨宮內。作願適竟，餘處悉斷，唯雨宮裏，七日七夜。」 (T.04, no.202, 439c27-440a19)

以上に引用した梵文及び漢訳のパラレルとの比較から、相違する部分は見られるものの<sup>35</sup>、

<sup>35</sup> 残念ながら、この断片に見られる相違が何に由来するものか明らかではない。ここで示した断片の比定に誤りがないならば、トカラ語に訳された段階で増広された可能性が指摘されるが、現在では失われた別系統の伝承に起因する可能性も考慮に入れるべきであろう。

基本的には THT1550 が *Māndhātṛ* 王の物語に比定される事が窺えよう<sup>36</sup>。

#### 4. トカラ仏教における阿含經典の受容について

以上に示したように、本稿で扱った三点のトカラ語 B 断片 THT404, 590, 1550 は阿含經典中に関連する記述を持っていた。これまでに知られている限りでは、トカラ語仏典に見られる阿含經典はあまり多いとは言えない。また、それらについても多くは梵語・トカラ語による *bilingual* のものであった。トカラ語仏典においてこれらの *bilingual* による仏典がどのような位置を占め、或いは利用されていたのか、確かな事は明らかではない<sup>37</sup>。ただ、これらの *bilingual* による断片以外にトカラ語のみで書かれた断片に関しても、阿含經典に比定或いは関連づけられる部分が指摘されており<sup>38</sup>、これらの断片と本稿で扱った断片の存在からトカラ仏教にも説一切有部系統の阿含經典の基本的な世界観が伝えられ、それらがトカラ語にも翻訳されていた事を窺う事ができる。

このようなトカラ仏教における阿含經典の教義の受容については、美術史の観点から檜山 (2010, 2012) が指摘するように、*Kizil* 石窟第 118 窟などに残された壁画によっても知られるところである。

#### 5. 結論

本稿では阿含經典中に関連する記述を持つ三点のトカラ語 B 断片を紹介した。これまで指摘されたトカラ語文献中の阿含經典は多くが梵文・トカラ語の *bilingual* によるものであり、トカラ語のみで書かれた断片は非常に少ない状況であったが、本稿で紹介した三点の断片から阿含經典中に記された説一切有部の基本的な仏教的世界観がトカラ語にも翻訳されていた事を改めて確認する事ができた。

トカラ仏教に阿含經典に記述される仏教的世界観が知られていた事は *Kizil* の石窟壁画の研究によって既に論証されていたが、本稿で扱った断片の存在はトカラ語文献の側からの裏付けを補強したと言えるだろう。

これまでの研究から明らかにされた範囲内では、トカラ語文献は広義の説一切有部の系統に属しているが、実際にどのような教義を受容したのかと言う点についてトカラ語文献からは不明な点も多く残されている。残存するトカラ語文献はほとんどが状態の良くない断片であり研究に際して困難が多いが、今後より緻密な研究を行う事によってこの点が明らかにされる事を期待している。

#### 補論: A373 (= THT1007) + THT1514 について

<sup>36</sup> B111 には *mūrdhāgate* という名前の王が見られるが、残存部分の内容から恐らくここで扱っている *Māndhātṛ* 王の物語とは異なる物語であると推定される。

<sup>37</sup> Waldschmidt (1952-1962 and 1955), Couvreur (1967 and 1968) 及び Enomoto (1997) を参照。これらの *bilingual* の断片の一部は当該仏典全体を扱うのではなく、その一部を抜き出したものであり、トカラ仏教徒がこのような仏典を作成した意図については不明である。

<sup>38</sup> トカラ語 B 断片 B284, Pinault (1989), Dschi (1943: 317-323) 及び荻原 (2009a, 2011) を参照。



ドイツ所蔵断片 THT1514 は *Shorchuk* で発見されたトカラ語 A による断片であり、写真が TITUS 及び IDP で公開されているが、これまで研究者によって研究された事がなだけでなく、Adaktylos et al. (2007) で公表されたトカラ語 A 断片のリストにも登録されておらず、一般にトカラ語 A 断片とは認識されていない。ただ、この断片を納めたプレートに貼られた紙片には、当初「トカラ語 B」とあった記載の「B」が抹消されており、ある時点でトカラ語 A による断片であると認識された事が窺える。断片のサイズは横 10cm・縦 10.1cm であり、罫線が書かれていた形跡は見られず、片面のみにトカラ語 A が記されている。この断片に見られる文字は一般のトカラ語仏典に使用される文字とは異なり、完全な楷書体とは言えない。

一方、同じく *Shorchuk* で発見されたドイツ所蔵トカラ語 A 断片 A373 (= THT1007) もこの断片に非常によく似た字体で書かれているだけでなく、用いられている紙や片面にのみ書写されている点が共通している。この断片は *TochSprR(A): 207* で転写が公表されているが、韻文で書かれているという事を除いて、これまでどのような内容の断片なのかについては不明なままであった。

筆者の調査によれば、この二断片は直接接合する。接合後のサイズは横 13.5cm・縦 22.4cm である。即ち、本来 THT1514 は A373 の右下の欠落部分に位置しており、THT1514a1-3 は A373a6-8 の右側の欠けている部分に相当する。ただし、この二断片は直接接合するとは言え、以下の転写に見られるように残存部分が少なく、正確な比定には困難を伴うが、在証される人名と文脈から筆者は漢訳『増壹阿含經』卷二十二に関連する記述を含んでいると判断した。

[転写]

- 1 /// (su)bhādrenam || puttiśparamṣim [ci]ṃntāmaṇi [cu] -
- 2 /// śantām pñintu swāṣṣantām ‡ semn waste
- 3 /// .t. bramñkaṭ | skatampeṣim param ñkaṭ | še
- 4 /// [na]ṃ wtoṣ | wsokonyo ‡ ślāñcāl | mrāc<sup>ā</sup> | -
- 5 /// sem waste yatar | p<sub>u</sub>kaṃ ka[k]o - - - -
- 6 /// - - c<sup>ā</sup> | tñi pkā[t] | ārt | y. - .[py]. - [r]<sub>(v)</sub> - -
- 7 /// (se)m waste naṣt | p<sub>u</sub>kis p<sub>a</sub>(r)[m](a)[ñ]k<sub>(v)</sub> pācar | [s]ūmāgati
- 8 /// [mr]iccāsyo wo<sup>[1]</sup> - - - snumṣim cuṣim ārt<sub>(v)</sub><sup>[2]</sup> c. -
- 9 /// l(k)ātsi k[ā](ru)ñik | wa .i [ka] .[t]. -
- 10 /// (ā)[kā]l | tsalp | [s]ā[m]<sub>(v)</sub> [klo]p<sub>a</sub>[nt](w)ä[s]<sub>(v)</sub>
- 11 /// .ṣ. - - - - -

[注釈]

(1): この aksara の後にさらに 2 aksara 続いているが、原文書を調査した際、この部分は本来この部分に接合されるべきではない事が明らかになった。ただし、どこに接合

されるべきかについては確定できなかった。

- (2): この語は Carling (2009: 47a) に項目として立てられているが、本断片に在証される単数・斜格の形式は登録されておらず、初出の語形である。また、この語に先行する *cuṣim* は二人称代名詞 *tu* の斜格である *cu* に形容詞形成の接尾辞が附されて形成された形容詞の単数・斜格であるが、これまではこの代名詞から同じ方法で形成された形容詞としては *cwaṣi\** という語形のみが知られており、初出である。

[和訳]

- 1 /// *Subhadra* (の韻律) で || 仏果たる如意寶珠を、あなたを ...
- 2 /// ... しながら、福德を雨降らせながら ... 。避難所 ...
- 3 /// ... バラモンは十の力を持つ者の栄光 (= 仏果) を ... 神 ...
- 4 /// ... 歡喜を以て ... に置いた ... 。合掌をして、頭頂を ...
- 5 /// ... は避難所とします。あらゆる所に行き渡った ...
- 6 /// ... へと彼女はあなたに使者を ... するつもりでした。...
- 7 /// あなたは避難所であり、全ての者にとっての希望、父親です。 *Sumāgati*
- 8 /// ... 香によるあなたの使者を<sup>[1]</sup> ... ///
- 9 /// 会うために慈悲深き者は ... ///
- 10 /// 願望 ... 彼女は種々の苦から自由になった。 ///
- 11 [和訳不能]

[注釈]

- (1): この部分の記述を含めて、a4 以降の内容は以下の漢訳仏典の記述と関係づける事ができよう<sup>39</sup>。

『增壹阿含經』

「是時，長者女沐浴身體，手執香爐，上高樓上，叉手向如來，而作是說。唯願世尊當善觀察無能見頂者，然世尊無事不知，無事不察，女今在此困厄，唯願世尊當善觀察。

又以此偈而歎曰。

觀世靡不周，	佛眼之所察，	降鬼諸神王，	及降鬼子母。
如彼噉人鬼，	取人指作鬘，	後復欲害母，	然佛取降之。
又在羅閱城，	暴象欲來害，	且如自歸命，	諸天歎善哉。
復至馬提國，	復值惡龍王，	見密迹力士，	而龍自歸命。
諸變不可計，	皆使立正道，	我今復值厄，	唯願尊屈神。
爾時香如雲，	玄在虛空中，	遍滿祇洹舍，	住在如來前。
諸釋虛空中，	歡喜而作禮，	又見香在前，	須摩提所請。

<sup>39</sup> トカラ語 B 断片 B514, 515 にも *sumāgati* という人名が見えるが、この物語とは異なっている。

爾時，阿難見祇洹中有此妙香。見已，至世尊所。到已，頭面禮足，在一面立。爾時，阿難白世尊言。唯願，世尊。此是何等香，遍滿祇洹精舍中。世尊告曰。此香是佛使，滿富城中須摩提女所請。汝今呼諸比丘。盡集一處而行籌，作是告勅。諸比丘有漏盡阿羅漢，得神足者，便取舍羅，明日當詣滿富城中，受須摩提請。」

(T.02, no.125, 661c11-662a11)

『須摩提女經』<sup>40</sup>

「爾時，須摩提女以香油塗身登高樓頭，遙白佛言。世尊。女今在難，為眾邪所逼，願世尊大慈大悲救濟危厄。於是，香氣如雲往到祇桓精舍。阿難見香非常所見，白佛言。世尊。此香異香從何處來。佛言。此香是佛使之香，今須摩提女在滿富城中，為諸邪道所逼，今遣香來請我并及卿等。速鳴槌集眾普會堂上，語言。今須摩提女在滿富城中，為眾邪道所逼，今遣香來請佛并及时眾，若有得神通變化者受籌，不得者默然。」

(T.02, no.128a, 836c1-11)

#### 参考文献

- Adaktylos, Anna-Maria et al. (2007) A Concordance to the United Tocharian Texts of the Berlin Turfan Collection. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta Tocharica*. Heidelberg: Winter, 39-78.
- Adams, Douglas Q. (1999) *A Dictionary of Tocharian B*. Amsterdam-Atlanta: Rodopi.
- Carling, Gerd (2009) *Dictionary and Thesaurus of Tocharian A*. Volume 1: A-J. in collaboration with Georges-Jean Pinault and Werner Winter. Wiesbaden: Harrassowitz.
- Couvreur, Walter (1967) Sanskrit-tochaarse en Sanskrit-koetsjische trefwoordenlijsten van de Dīrghāgama (Dīghanikāya). *Orientalia Gandensia* IV, 1967 [1969]: 151-165.
- Couvreur, Walter (1968) Zu einigen Sanskrit-Kutschischen Listen von Stichwörtern aus dem Catuspariṣatsūtra, Daśottarasūtra und Nidānasamyukta. In: J.C.Hestermann et al. (eds.), *Pratidānam: Indian, Iranian, and Indo-European Studies presented to Franciscus Bernardus Jacobus Kuiper on his sixtieth Birthday*. The Hague: Mouton, 275-282.
- DN = *The Dīgha-Nikāya*. Vol. III. London: Pali Text Society, 2006 [1911].
- Dschi, Hiän-lin (1943) Parallelversionen zur tocharischen Rezension des Puṇyavanta-Jātaka. *ZDMG* 97: 284-324.
- 越後屋正行 (2009) 「『長阿含』『世記經』の註釈書的要素 「転輪聖王品」「三中劫品」を中心として」『駒沢大学大学院仏教学研究會年報』第 42 号: 218-205 (31-44).
- 榎本文雄 (1980) 「*Udānavarga* 諸本と雜阿含經、別訳雜阿含經、中阿含經の部派帰属」(On the

<sup>40</sup> 異訳である『須摩提女經』(T.02, no.128b, 839b22-c22) にも関連する記述が見られるが、内容は既に引用した『增壹阿含經』と若干の字句の相違を除いて同文であるため、ここでは引用を控える。また、『佛説給孤長者女得度因縁經』(T.02, no.130, 846c23-847a14) 及び『佛説三摩竭經』(T.02, no.129, 844b19-c3) も参照。

- Recensions of the *Udānavarga* and the Schools to which the *Samyuktāgama*, its Alternative Translation, and the *Madhyamakāgama* are to be Ascribed). *Journal of Indian and Buddhist Studies* 28-2: 933-931 (55-57).
- 榎本文雄 (1988) 「初期仏教思想の生成—北伝阿含の成立」『インド仏教 I』 岩波講座 東洋思想 第 8 卷、岩波書店: 99-116.
- Enomono Fumio (1997) Sanskrit Fragments from the \*Saṃgītinipāta of the *Samyuktāgama*. In: Petra Kieffer-Pülz and Jens-Uwe Hartmann (eds.), *BAUDDHAVIDYĀSUDHĀKARAH. Studies in Honour of Heinz Bechert on the Occasion of His 65th Birthday*. (Indica et Tibetica 30). Swisttal-Odendorf: Indica et Tibetica Verlag, 91-106.
- Hartmann, Jens-Uwe and Klaus Wille (1992) Die nordturkestanischen Sanskrit-Handschriften der Sammlung Hoernle (Funde buddhistischer Sanskrit-Handschriften, II). In: Jens-Uwe Hartmann, Klaus Wille, Claus Vogel and Günter Grönbold (eds.), *Sanskrit-Texte aus dem buddhistischen Kanon: Neuentdeckungen und Neueditionen II*. (Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 4). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 9-63.
- Hartmann, Jens-Uwe and Klaus Wille (1997) Die nordturkestanischen Sanskrit-Handschriften der Sammlung Pelliot (Funde buddhistischer Sanskrit-Handschriften, IV). In: Heinz Bechert, Sven Bretfeld, and Petra Kieffer-Pülz (eds.), *Untersuchungen zur buddhistischen Literatur: Zweite Folge: Gustav Roth zum 80. Geburtstag gewidmet*. (Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden, Beiheft 8). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 131-182.
- 檜山智美 (2010) 「キジル石窟第一一八窟（海馬窟）の壁画主題」『美術史』 168: 358-372.
- Hiyama Satomi (2012) A New Identification of the Murals in Kizil Cave 118: The Story of King Māndhātā. *Journal of Inner Asian Art and Archaeology* 5: 145-170.
- Kasai Yukiyo (2004) Ein Kolophon um die Legende von Bokug kagan. 『内陸アジア言語の研究』 (SIAL) XIX: 1-27 (with plates).
- 笠井幸代 (2006) 「トカラ語より翻訳された未比定のウイグル語仏典註釈書」『内陸アジア言語の研究』 (SIAL) XXI: 21-47.
- Krause, Wolfgang (1952) *Westtocharische Grammatik. Band I. Das Verbum*. Heidelberg: Winter.
- Krause, Wolfgang and Werner Thomas (1960) *Tocharisches Elementarbuch. Band I. Grammatik*. Heidelberg: Winter.
- 百済康義 (1972) 「トカラ語仏典 *Udānālaṃkāra* におけるアビダルマ的註解」『仏教学研究』 29: 37-62.
- Malzahn, Melanie (2007) The Most Archaic Manuscripts of Tocharian B and the Varieties of the Tocharian B Language. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta Tocharica*. Heidelberg: Winter, 255-297.
- Malzahn, Melanie (2010) *The Tocharian verbal system*. Leiden: Brill.
- MW = Monier-Williams, Monier (1899) *Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press.
- 岡野潔 (1998) 「インド正量部のコスモロジー文献、立世阿毘曇論」『中央学術研究所紀要』

第 27 号: 55-91.

荻原裕敏 (2009a) 「トカラ語 A<<Pun̄yavanta-Jātaka>>に於ける阿含經典の引用について」『東京大学言語学論集』(TULiP) 28: 133-171.

荻原裕敏 (2009b) *Researches about Vinaya-texts in Tocharian A and B* (doctoral dissertation. Paris, EPHE).

Ogihara Hirotooshi (2010) On a fragment of the *Cakkavatti-sihanāda-sutta* in Tocharian B. 『西域歴史語言研究集刊』 第四輯: 187-199.

荻原裕敏 (2011) 「『阿蘭那經』に比定された *SHT* 所収梵語断片について」『東京大学言語学論集』(TULiP) 31: 235-268.

荻原裕敏 (2012) 「トカラ語 B の『Avadāna 写本』断片について」『東京大学言語学論集』(TULiP) 32: 109-243.

Peyrot, Michaël (2008) *Variation and Change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.

Pinault, Georges-Jean (1989) Une version koutchéenne de l'Aggañña-Sutta. *Tocharian and Indo-European Studies* 3: 149-220.

Pinault, Georges-Jean (2007) Concordance des manuscrits tokhariens du fonds Pelliot. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta Tocharica*. Heidelberg: Winter, 163-219.

Rhys Davids, T. W. and C. A. F. (1921) *Dialogues of the Buddha*. Part III, London: Oxford University Press. Reprinted in 1971.

Schmidt, Klaus T. (1986) *Fragmente eines buddhistischen Ordinationsrituals in westtocharischer Sprache. Aus der Schule der Sarvāstivādins. Text, Übersetzung, Anmerkungen und Indizes*. [unpublished habilitation thesis].

Schmidt, Klaus T. (2000) Wie zuverlässig sind unsere tocharischen Textausgaben? Kritische Bemerkungen zu den Editionen der *Tocharischen Sprachreste, Sprache B*, von E. Sieg, W. Siegling und W. Thomas und einigen weiteren westtocharischen Textstellen. *Die Sprache* 39-2: 224-238.

*SHT* = *Sanskrithandschriften aus den Turfanfunden*. Teil 1-4, Wiesbaden; Teil 5-11, Stuttgart: Franz Steiner, 1965-2012.

T. = *Taishō Tripitaka*.

Tamai Tatsushi (2011) *Paläographische Untersuchungen zum B-Tocharischen*. Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.

*TEB* = Krause, Wolfgang and Werner Thomas (1960) and Thomas, Werner (1964).

Thomas, Werner (1957) *Der Gebrauch der Vergangenheitstempora im Tocharischen*. Wiesbaden: Harrassowitz.

Thomas, Werner (1964) *Tocharisches Elementarbuch. Band II: Texte und Glossar*. Heidelberg: Winter.

*TochSprR(A)* = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1921), *Tocharische Sprachreste, I. Band: Die Texte, A. Transkription; B. Tafeln*. Berlin-Leipzig: de Gruyter.

- TochSprR(B)II* = Sieg, Emil and Wilhelm Siegling (1953), *Tocharische Sprachreste. Sprache B. Heft 2. Fragmente Nr. 71-633*. Aus dem Nachlass hrsg. von Werner Thomas. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Vaidya, P. L. (1958) *Avadāna-śataka*. <Buddhist Sanskrit Texts – No. 19>. Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- Vaidya, P. L. (1959) *Divyāvadāna* (Buddhist Sanskrit Texts, No. 20). Darbhanga: The Mithila Institute of Post-Graduate Studies and Research in Sanskrit Learning.
- Waldschmidt, Ernst (1952-1962) *Das Catuspariśatsūtra* (ADAW). Berlin.
- Waldschmidt, Ernst (1955) *Zu einigen Bilinguen aus den Turfan-Funden*. Nachrichten der Akademie der Wissenschaften in Göttingen. I. Phil-hist. Kl. 1955, Nr. 1: 1-20.
- Winter, Werner (1987) Distributive numbers in Tocharian. *Tocharian and Indo-European Studies* 1, 238-244.
- Winter, Werner (1992) Tocharian. In: Jadranka Gvozdanović (ed.), *Indo-European Numerals*. Berlin/New York: de Gruyter, 97-161.
- 八尾史 (2012) 「『根本説一切有部律』「薬事」における経典「引用」の諸相(三)–附・逆引き経典対応表」『仏教研究』40: 291-318.
- 八尾史 (2013) 『根本説一切有部律薬事』東京: 連合出版.

[追加]

筆者は『東京大学言語学論集』第32号で「トカラ語 B の『Avadāna 写本』断片について」という論文を公表した。その際、これまで指摘された事のない動詞語根として *maut-* (?) ‘to dedicate (?)’を設定した。その後、『東京大学言語学論集』第33号所収の“*Tocharian Fragment THT333 in the Berlin Collection*”でこの語根の現在受動分詞の形式を追加し、この語根の過去形は第 I 類、現在形は第 VI 類に属する点を追加した。さらにその後の調査によって下記に見られるような在証例がある事に気付いた。

IOL Toch 760b2: /// – *śaṣṣe rūwe mautam m[ā] wi* ///

この断片に見られる語形は三人称単数或いは複数・接続法・能動態の形式である。以上の三例から語根 *maut-* は現在形第 VI 類、接続法第 V 類、過去形第 I 類に属する事が明らかになった。なお、このような動詞の変化は他の動詞にも見られるものである事からもこの推定が裏付けられる。また、第33号掲載の拙稿で紹介した現在形の在証例と同じく、この用例でも語根 *maut-* の目的語として *rūwe* が使用されている点は注目される。ただ残念ながら、*rūwe* の語義は明らかでない。

[訂正]

前掲拙稿で『Avadāna 写本』断片を公表したが、この論文は公開されている写真を利用し

て得られた成果を紹介したものであった。その後 2013 年 7 月にベルリン所蔵の『Avadāna 写本』断片全点の原文書を調査する機会を得た。公開されている写真による解読では不明だった点や明らかな誤りだけでなく、新たに断片を接合する事もできた。この結果、前掲拙稿は索引も含めて全体にわたって修正される必要性が生じてきた。ただ、現在はその機会がすぐには得られないため、ここでは転写における重要な修正点のみを列挙し、全面的な改訂については現在準備中の英語版において行いたい。

p.113: THT1165 + THT1548

a3: *mā[m](cuṣ)k(e ṣai) > mā[m](ṣ)k(e ṣai)*

筆写の際における *mā[m]{cu}(ṣ)k(e)* の書き誤りと推定される。

b5: *kār[p](a k)e(nekaṃ)[n](ts)[e] > kār[p](a) .e - [n](ts)[e]*

*(k)e(nekaṃ)[n](ts)[e]* が期待されるが、欠落部分には 1 akṣara 不足している。書写の際に 1 akṣara 落とした可能性がある。

p.141: THT1556

a4: *śroṇakoṭivimṣe > śroṇe koṭivimṣe*

b2: */// - - kekenuwa ārwer > /// - - - sa kekenuwa ā(r)wer*

Toch.B: *ārwer* の *-r* は実際には書かれていない。

b2: *[a]ll[ok] \ p(r)e > [a]ll[ok] \ pre*

b4: */// .k(a)nt(i)mpa > /// [t] k(a)nt(i)mpa*

或いは */// [n] k(a)nt(i)mpa*。

p.148: THT1253 + THT3056

b5: *rī tane .ā > rī tane .[o]*

p.153: THT1551

a5: *sā<sub>u</sub> \ wertsīy[ai] > sā<sub>u</sub> \ wertsīy[o]*

b4: *aśśī O - -/// > aśśī- O [ṣ](ṣ)[i] -///*

p.154: THT1683

b5: *ṣmeñca[nts]e .o /// > ṣmeñca[nts]e [s]o ///*

p.156: THT1285 + THT1507 + THT1680 + THT2981.frg.1 + THT3054

b5: *- - [pā]tarś > (ṣañ) [pā]tarś*

Toch.B: *pātārś* に先行する欠落部分は 2 akṣara ではなく 1 akṣara であり、*[pā]* と読んだ akṣara は実際には *(ñ)[pā]* であると判断される。

p.182: THT1554 + THT3112

b2: *cwi* [t]. – – – [r]s(ɿ) *vaširšš*. > *cwi* [t]. – – *na* [r]s(ɿ) *vaširšš[e]*

b5: *pañāktamñe* > *pañāktamñe*

p.184: THT2996 + THT2999 及び p.187: THT1245

この三つの断片は直接接合する事が明らかになった。以下にその転写を掲げる。

a

1 /// (ga)ndhā(r)v(i)ñña ñikcya = ptsarya waɿ ///

2 /// – kindarña mā rano ñäkcyā = [p]ts(a)[r](ya) ///

3 /// [ñ]ñ(a) gañika klyiye šaiym<sup>ä</sup> [s](a)[ñ]<sup>(ä)</sup> k(e)ktseñ<sup>ä</sup> y. ///

4 /// † k<sub>u</sub>(c)e no alloɿ prešyaine wnolmi t<sub>ä</sub>u rī(n)e ///

5 /// [š]im<sup>š</sup> kanmaskem s<sub>ä</sub>u weña – ///

b

1 /// (š)s(a)na ok[o]nta enepre šk[i] ye [nt]. ///

2 /// k[r](e)[nt](a) lywāwa s<sub>ä</sub> [t]ne tsamtsi † [cau] yāmorsa to[y]<sup>(ä)</sup> ///

3 /// [s](a)ñ<sup>ä</sup> kektsemne tetreñkusa – – yetwem wä ///

4 /// (wä)ssanma ñašša t<sub>ä</sub>y ai – [y]ā ///

5 /// – .[ā ñ].. l<sub>ä</sub>nt<sub>ä</sub>š weña ña(ka) ///

p.185: THT409

a5: – masketar > [še] masketar

pp.185-186: THT1126

a1: /// – – [nt]<sub>ɿ</sub> [ñ]. [d]. [ki] > /// – [m<sub>ä</sub>nt]<sub>ɿ</sub> [ñ]. [w]. [ki]

b2: v(ai)š(āli) /// > v(ai)ša(li) ///

p.188: THT1250

a1: *klāya* n[a] /// > *klāya* [tu](mem) ///

p.189: THT1513

a1: /// (šāri)putre e[p](i)[ya](c<sup>ä</sup>) > /// (šāri)putre[m] e[piya](c<sup>ä</sup>)

a2: /// l. [š]k[e] – – [sa]m[p]ānteñ<sup>ä</sup> > /// l. [š]k[e] ost sa]m[p]ānteñ<sup>ä</sup>

a3: /// – s(ā)<sub>u</sub> ñ. [š]ak > /// – s[ā]<sub>u</sub> ñ[āš]ak

a4: /// – – [t]. *taisa* > /// – [rš]k(a)[n](a) *taisa*

p.190: THT2995

b3: /// [r].. [m]ā > /// [m]ā



前掲拙稿において[r]..と読んだ部分は、別の断片が張り付いた箇所。

p.191: THT2998

b1: /// – r[n]ta > /// (śa)[rī]r[n]ta

p.192: THT3083

a1: /// – ylaiñäkte(nt)[s](e) /// > /// [l](.)[ī] ylaiñäkte(nt)[s](e) ///

b1: /// – – cc. .[ñ]. /// > /// [w](ai)[p](e)cc(e)[ññ]. ///

p.192: THT3110

a3: /// – || > /// [r](v) ||

## Three Tocharian B Fragments Related to the Āgama Texts

Ogihara Hirotoši

Keywords: THT404, THT590, THT1550, (Mūla-)sarvāstivādins , Āgama texts

### Abstract

In this paper, I introduce three Tocharian B fragments related to the Āgama texts. Most of the Tocharian Buddhist texts so far identified as the Āgama texts are bilingual ones in Sanskrit and Tocharian A or B except for some Tocharian fragments or quotations in Tocharian texts. Here THT404, 590, and 1550 are treated in comparison with parallel texts in Sanskrit, Pali, and Chinese. Below is the list of identification of these fragments:

THT404: *Cakkavatti-sīhanāda-suttanta*

THT590: Explanation on *antara-kalpa-*

[cf. *Shijijing: Sanzhongjie pin* (T.01, no.0001)]

THT1550: *Māndhātṛsūtra*

The comparison with other parallel texts indicates that basically the doctrine given in these fragments conforms to that given in the Āgama texts of the (Mūla-)sarvāstivādins in spite of some disagreements. It leads us to think that there would have been some different traditions in this Buddhist sect, which is also observable in the Vinaya texts.

(おぎはら・ひろとし 中国人民大学国学院)